痙攣するデジャ・ヴュ
――ビデオで読む小津安二郎――
⑰小津安二郎作品地名・人名稿（補遺）：付　講演ふたつ

中　澤　千磨夫

凡例

本稿は「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑪小津安二郎作品地名・人名稿（戦後モノクロ映画編）」（『北海道武蔵女子短期大学』39、二〇〇七・三）、「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑫小津安二郎作品地名・人名稿（カラー映画編Ⅰ）」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』41、二〇〇九・三）、「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑬小津安二郎作品地名・人名稿（カラー映画編Ⅱ完）」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』42、二〇一〇・三）、「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑭小津

安二郎作品地名・人名稿（無声映画編Ⅰ）」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』43、二〇一一・三）、「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑮小津安二郎作品地名・人名稿（無声映画編Ⅱ完）」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』44、二〇一二・三）、「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑯小津安二郎作品地名・人名稿（戦前・戦中トーキー映画編）」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』45、二〇一三・三）を承けるものである。

ここでは『瓦版かちかち山』（一九二七年）、『鏡獅子』（一九三五年）、『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』（一九四二年）、『月は上りぬ』（一九五五年）、『青春放課後』（一九六三年）、『大根と人参』（一九六三年）の六作品に登場する地名と人名を見出しとして掲出し、読み方と簡単な注を付した。地名・人名以外の固有名詞・普通名詞で掲出したものがあるが、その掲出基準は必ずしも一定していない。ただし、『瓦版かちかち山』、『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』、『月は上りぬ』は脚本のみ、『鏡獅子』は映画のみ、『大根と人参』は覚書のみをテキストとした。

テキストとして用いたのは、『鏡獅子』は『小津安二郎ＤＶＤ―ＢＯＸ第四集』（二〇〇三・一二、松竹株式会社）、『瓦版かちかち山』、『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』、『月は上りぬ』、『青春放課後』の脚本、『大根と人参』の覚書は井上和男編『小津安二郎全集［下］』（二〇〇三・四、新書館）。『青春放課後』の映像はＮＨＫＢＳプレミアムで二〇一三年一〇月一四日に再放送されたものを使用した。

掲出の優先順位は映画（テレビ）内での台詞、映像に映し出されているもの、脚本に出てくるもの（ト書きなどの説明）とした。掲出見出しのうしろに括弧書きで示したのはその順位による。括弧書きがないものは台詞としてのみ出るもの。その場合、脚本に書かれていても特に注記しなかった。「映像」とあるのは、映画（テレビ）から読める情報である。「『全集』」とあるのは、脚本にト書などとしてのみ出てくるもの、また、脚本のみ残る作

品の場合は台詞も含める。「台詞」とあるのは「映像」や「『全集』」に先んじて登場した場合の映画（テレビ）内での台詞、もしくは「映像」や「『全集』」の後に出た台詞を指す。「スタッフ」、「人物名」、「ナレーション」、「長唄」、「キャスト」、「合唱」、「のぞきからくり」、「クレジット」、「歌」、「ＢＧＭ」、「テレビの台詞」はそれぞれを指す。

「小津安二郎作品地名・人名稿」は本稿を含め七本。補訂の上、本年『小津安二郎地名・人名事典』（言視社）として刊行します。

仕事の性質上、間違い多きことを恐れます。ご教示をお願いいたします。

「小津安二郎と志賀直哉」は二〇一三年一〇月一六日、中華人民共和国上海交通大学外国語学院で行われた講演の記録。「小津安二郎の見つめた戦争」は二〇一三年十一月一六日、東京都江東区古石場文化センターで行われた講演の記録。

『瓦版かちかち山』（一九二七年）

脚本現存（小津安二郎執筆になる最初の脚本。「昭和二年五月八日印行」（『小津安二郎全集［下］』）。「これを原作に、昭和九年、荒田正男が新たにシナリオを書き、井上金太郎が監督し、同じタイトルで映画化されている」（同前）。

原作・脚色　小津安二郎

監督　燻屋鯨平
撮影　（空欄）

与三（御用聞実はすり二五〜八）
その妹小染（深川辰巳芸者一九〜二二）
その母（病篤し）
与三の手下（七八人）
菜花屋清三郎（小染の旦那）
六蔵（すり）
宗吉（すり）

燻屋鯨平【いぶしやげいべい】（スタッフ）　小津安二郎のペンネーム。『生れてはみたけれど』の潤色は燻屋鯨兵衛。

深川【ふかがわ】（人物名・『全集』）『出来ごころ』の項参照。

辰巳【たつみ】（人物名・『全集』）　深川のこと。江戸時代、深川が江戸城から見て辰巳、つまり東南の方向にあることからこう呼ばれた。

辰巳芸者【たつみげいしゃ】（人物名・『全集』）　深川の芸者。前項参照。

竹屋の渡し【たけやのわたし】（『全集』）　隅田川の渡し船。山谷堀と向島三囲神社を結ぶ。江戸時代初期から。言問橋架橋（一九二八年）で姿を消す。待乳の渡し、竹家の渡し、向島の渡しとも。

浜十三丁【はまじゅうさんちょう】（『全集』）　不詳。

唐草【からくさ】（『全集』）　唐草模様。唐草文様。『戸田家の兄妹』の「唐草模様」の項参照。

唐紙【からかみ】（『全集』）　唐紙障子。唐紙を貼った襖障子。唐紙は唐到来の紙から。

『鏡獅子』（一九三六年）

二十四分　白黒・トーキー

六月二十九日　帝国劇場試写会

プリント現存

配役

弥生　獅子の精　尾上菊五郎

胡蝶　尾上琴次郎・尾上しげる

長唄

唄　松永和風・富士田新蔵
三味線　柏伊三郎・杵屋勝松
太鼓　望月太左衛門
大鼓　柏扇十郎
小鼓　望月朴清
笛　堅田喜三郎

監督　小津安二郎
解説・原案　守随憲治
朗読　増田順二

松竹株式会社【しょうちくかぶしきがいしゃ】（映像）　オープニングクレジット。『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『父ありき』の項参照。

管理委員会【かんりいいんかい】（映像）「管理委員会／映倫／E―125」。映画倫理委員会(映倫)（一九五六年～）の前身である映画倫理規程管理委員会（一九四九～五六年）。次項参照。小津作品でほかに「管理委員会」と印されているのは『宗方姉妹』（「管理委員会／映倫／212」）、『麦秋』（「管理委員会／映倫／443」）、『お茶漬の味』（「管理委員会／映倫／700」）、『東京物語』（「管理委員会／映倫／1069」）、『早春』（「管理委員

会／映倫／１９３８」）。『鏡獅子』に「管理委員会」と印されている事情は不詳。戦後公開されたということか。「E」は教育映画ということか。

映倫【えいりん】（映像）「管理委員会／映倫／E―１２５」。ここでは映画倫理規程管理委員会（前項参照）。

六代目尾上菊五郎主演【ろくだいめおのえきくごろうしゅえん】（映像）オープニングクレジット。

六代目【ろくだいめ】（映像）『箱入娘』の項参照。

尾上菊五郎【おのえきくごろう】（映像）オープニングクレジット。『箱入娘』の「六代目」の項参照。

歌舞伎座【かぶきざ】（映像）一九二四年竣工の第三期歌舞伎座。一九四五年五月の東京空襲で焼失。『麦秋』の項参照。

（恒）例初春大歌舞伎【（こう）れいはつはるおおかぶき】（映像）看板の文字。

五代目菊五郎【ごだいめきくごろう】（ナレーション）五代目尾上菊五郎。一八四四～一九〇三年。明治時代の歌舞伎役者。屋号は音羽屋。長男が六代目尾上菊五郎。

江戸っ子【えどっこ】（ナレーション）江戸生まれ江戸育ちの人。東京生まれ東京育ちの人。三代続いた江戸っ子などという。気風の良さ、金離れの良さを持つという。特に下町の人についていう。東京の住人の多くは地方出身であり、居住者であっても江戸っ子ではなく、東京人である。

九代目市川団十郎【くだいめいちかわだんじゅうろう】（ナレーション）一八三八～一九〇三年。明治時代の歌舞伎役者。屋号は成田屋。

「道成寺」【どうじょうじ】（ナレーション）「京鹿子娘道成寺」。『彼岸花』の項、『お茶漬の味』の「京鹿子娘道

成寺」の項参照。

「藤娘」【ふじむすめ】（ナレーション）　歌舞伎舞踊の演目。

「禿」【かむろ】（ナレーション）　羽根の禿。歌舞伎舞踊の演目。

「保名」【やすな】（ナレーション）　歌舞伎舞踊の演目。

「喜撰」【きせん】（ナレーション）　歌舞伎舞踊の演目。

「三番叟」【さんばんそう】（ナレーション）　歌舞伎舞踊の演目。

「知盛」【とももり】（ナレーション）　碇知盛。「義経千本桜」二段目「渡海屋・大物浦」の段の通称。

「土蜘蛛」【つちぐも】（ナレーション）　歌舞伎舞踊の演目。

「鏡獅子」【かがみじし】（ナレーション）「春興鏡獅子」。長唄舞踊の演目。

「石橋」【しゃっきょう】（ナレーション・長唄）　能の演目。獅子の舞が特色。歌舞伎にも取り入れられ、「春興鏡獅子」などを石橋物という。

「枕獅子」【まくらじし】（ナレーション）「英獅子乱曲（はなぶさししのらんぎょく）」。歌舞伎舞踊の演目。

ふき【ふき】（映像）　胡蝶の名。

さね【さね】（映像）　胡蝶の名。

弥生【やよい】（ナレーション）『春興鏡獅子』の主人公。はじめ江戸城大奥の女小姓として舞い、やがて獅子の精と一体化する。

福地桜痴【ふくちおうち】（ナレーション）　福地源一郎。一八四一〜一九〇六年。明治時代のジャーナリスト、

劇作家。一八八九年、歌舞伎座を創設。「春興鏡獅子」（「鏡獅子」の項参照）を作詞。

国際文化振興会【こくさいぶんかしんこうかい】（ナレーション）　一九三四年創設。日本文化を海外に紹介する財団法人。国際交流基金の前身。

ミツワ石鹸【みつわせっけん】（映像）　歌舞伎座の緞帳に刺繍された商品名。一八六〇年、三輪善兵衛が創業した丸見屋が一九一〇年に発売した石鹸。六四年、社名をミツワ石鹸に変更。七五年の倒産でブランド名は消えたが、二〇〇七年、玉の肌石鹸が商標権を取得し、翌〇八年、ミツワ石鹸ブランドの石鹸が復活し現在に至る。「わっわっわあ輪がみっつ、わっわっわあ輪がみっつ、ミツワミツワミツワ石鹸」のテレビコマーシャルは広く知られた。

東【あずま】（長唄）　関東。

天の浮橋【あまのうきはし】（長唄）　天地の境。高天原と地上との架け橋・通路。

女神【めがみ】（長唄）　女の神。イザナミノミコト。

男神【おがみ】（長唄）　男の神。イザナギノミコト。

伊勢【いせ】（長唄）　伊勢国。志摩・伊賀を除く現在の三重県の旧国名。

川崎音頭【かわさきおんど】（長唄）　民謡。伊勢音頭。お伊勢参りの遊郭が多数あった伊勢古市に接した商業地河崎に発する。

『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』（一九四二年）

脚本現存
映画製作は中止

脚本　斎藤良輔・小津安二郎・秋山耕作
演出　小津安二郎
撮影　厚田雄治
美術　浜田辰雄
録音　妹尾芳三郎
音楽　彩木暁一
制作担当　磯野利七郎

配役
前田隊長　（空欄）
宮本中尉　西村青児

足立軍曹　笠智衆
相原伍長　佐野周二
渡辺上等兵　坂本武
黒川上等兵　長尾寛
池内上等兵　油井宗信
間宮一等兵　志村久
山口一等兵　小藤田正一
長島一等兵　藤松正太郎

間宮【まみや】（キャスト）　志村久が演じる予定だった間宮一等兵。『麦秋』の間宮家、『秋日和』の間宮家に通ずる。

泰【たい】（『全集』、台詞）　タイ王国。脚本執筆時、大日本帝国と日泰攻守同盟条約を締結しており、タイは枢軸国の一員であった。

緬【めん】（『全集』）　ビルマ。

泰緬【たいめん】（『全集』）　タイとビルマ。

皇軍【こうぐん】（『全集』）　日本軍。天皇の軍隊。

ビルマ【びるま】（タイトル、『全集』、台詞）　ミャンマーの旧称。

英【えい】（『全集』） 英国。

印【いん】（『全集』） 印度。

英印【えいいん】（『全集』） 英国と印度。

英印軍【えいいんぐん】（『全集』） 英国・印度連合軍。

重慶【じゅうけい】（『全集』・台詞） 中国の都市。長江（揚子江）上流。日中戦争時、蒋介石の中華民国政府は首都南京陥落（一九三七年一二月）後、首都を重慶に移した。このため、日本軍は重慶爆撃を頻繁に行った。これはドイツによる第一次・第二次世界大戦時のロンドン爆撃、スペイン内戦でのゲルニカ爆撃に次ぐ無差別爆撃であり、のちのアメリカ軍日本爆撃・ベトナム北爆に繋がっていく。

重慶軍【じゅうけいぐん】（『全集』） 中華民国軍。蒋介石の軍隊。

ラングーン【らんぐうん】（『全集』・台詞） ビルマ（別項）の首都。現在のヤンゴン。

日章旗【にっしょうき】（『全集』） 『朗らかに歩め』、『一人息子』の項参照。

ビルマ人【びるまじん】（『全集』・台詞） ビルマ（別項）の人。

日の丸の旗【ひのまるのはた】（『全集』） 『一人息子』の項参照。

日の丸【ひのまる】（合唱） 「兵隊の合唱」（『全集』）。「赤い血潮で日の丸染めてよ／世界統一して見たいよ／染めてやりたや世界の地図を／昇る旭の紅によ／俺が死んだら三途の川原でよ／鬼を集めて相撲とるよ」（『全集』）。

世界【せかい】（合唱） 前項「日の丸」の歌詞の一部。

世界の地図【せかいのちず】（合唱） 前々項「日の丸」の歌詞の一部。

下谷【したや】（台詞）『長屋紳士録』の項参照。

東京【とうきょう】（台詞・のぞきからくり）『大学は出たけれど』、『美人哀愁』、『東京の合唱』、『東京の女』、『出来ごころ』、『箱入娘』、『東京の宿』、『一人息子』、『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『父ありき』、『長屋紳士録』、『風の中の牝鶏』、『晩春』、『宗方姉妹』、『麦秋』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『東京暮色』、『彼岸花』『浮草』、『小早川家の秋』の項参照。

広小路【ひろこうじ】（台詞）『風の中の牝鶏』の項参照。

西郷さん【さいごうさん】（台詞）『生れてはみたけれど』、『長屋紳士録』の項参照。

西郷さんの銅像【さいごうさんのどうぞう】（台詞）『生れてはみたけれど』の「西郷隆盛像」の項参照。

びっくりぜんざい【びっくりぜんざい】（台詞）兵隊がラングーンを東京に想定し、広小路でびっくりぜんざいを食おうと想像する。びっくりぜんざい（大きな餅が入った汁粉）といえば大阪新世界が有名だが、広小路にもあったか。

松坂屋【まつざかや】（台詞）東海地方を拠点とする百貨店。ここでは上野店。一六一一年、呉服・小間物商として名古屋に創業。

百円札【ひゃくえんさつ】（台詞）ここでは聖徳太子と夢殿が印刷された旧百円札。『非常線の女』の項参照。

南無妙法蓮華経【なむみょうほうれんげきょう】（台詞）法華経の題目。

シャン山脈【しゃんさんみゃく】（台詞）天山山脈。テンシャン山脈の「シャン」からだろう。

カヴァカレイ【かばかれい】（台詞）ビルマの地名か。不詳。

モールメン【もおるめん】（台詞）　ビルマの地名。

マルタバン【まるたばん】（台詞）　マルダバン。ビルマの地名。

雲南【うんなん】（台詞）　中国の省。ビルマに接する。

マンダレー【まんだれえ】（台詞、『全集』）　ビルマの地名。

瀬戸物【せともの】（台詞）　愛知県瀬戸市を中心に生産される陶磁器の総称。または広く陶磁器。

西郷隆盛【さいごうたかもり】（台詞）　『生れてはみたけれど』、『大学よいとこ』、『長屋紳士録』の項、及び別項の「西郷さん」参照。

西郷隆盛の銅像【さいごうたかもりのどうぞう】（台詞）　『大学よいとこ』の項参照。「西郷さんの銅像」（別項）、『生れてはみたけれど』の「西郷隆盛像」参照。

山田長政【やまだながまさ】（台詞）　江戸時代初期、シャム（タイ）の日本人町で活躍した駿河出身の人物。

マラリヤ【まらりや】（台詞）　マラリア。ハマダラカが媒介する熱帯・亜熱帯の感染症。

デング病【でんぐびょう】（台詞）　デング熱。ヤブカが媒介する熱帯の感染症。

浅草【あさくさ】（台詞）　『一人息子』、『長屋紳士録』の項参照。

浅草の観音さま【あさくさのかんのんさま】（台詞）　東京都台東区（脚本執筆時は東京市浅草区）にある浅草寺。あるいはその本尊・聖観音菩薩。本尊は秘仏で見ることはできない。

観音さま【かんのんさま】（台詞）　観音菩薩。観世音菩薩。観自在菩薩。救世菩薩。

観音【かんのん】（台詞）　前項参照。

三河【みかわ】（台詞）　三河国。愛知県の東部にあたる。

三河の万才【みかわのまんざい】（台詞）　三河万歳。三河に伝わる伝統芸能。

天好の甲【てんほのこう】（台詞）　兵隊が使用した中国語（兵隊支那語）。頂好（てんほ）の甲。最高に良いこと。

南京虫【なんきんむし】（台詞）　トコジラミ。

ヒマラヤ【ひまらや】（合唱）　ヒマラヤ山脈。「兵隊の合唱」（『全集』）。「日の丸」（別項）。「ヒマラヤ雫のガンジス河でよ／大和男子が鰐を釣るよ／万里の長城で小便すればよ／ゴビの砂漠に虹が立つよ／霧の晴れたるロンドン街でよ／高く揚った鯉幟よ／ギャング絶えたるシカゴの街よ／孫の詣でる忠魂碑よ」（『全集』）。

ガンジス河【がんじすがわ】（合唱）　ガンジス川。「ヒマラヤ」（前項）参照。

大和【やまと】（台詞）　大和国。現在の奈良県に相当。転じて広く日本を指す。「ヒマラヤ」（前々項）参照。

大和男子【やまとおのこ】（合唱）　日本男児。「ヒマラヤ」の項参照。

万里の長城【ばんりのちょうじょう】（合唱）　中国の城跡遺構。秦の始皇帝が作らせたという通説が流布しているが、それ以前から建設されていた。現存するものの大半は明代に作られた。「ヒマラヤ」の項参照。

ゴビの砂漠【ごびのさばく】（合唱）　中国からモンゴルにかけて広がる砂漠。「ヒマラヤ」の項参照。

ロンドン【ろんどん】（合唱）　イギリスの首都。「ヒマラヤ」の項参照。

シカゴ【しかご】（合唱）　アメリカ合衆国の首都。「ヒマラヤ」の項参照。

忠魂碑【ちゅうこんひ】（合唱）　戦死者慰霊のため、明治以降神社などに建設された碑。在郷軍人会が中心になり、日本各地（海外含む）に建立された。一九四五年敗戦後、ＧＨＱの指令で多くが撤去されたが、一九五二

年独立回復により復元、新設されたものもある。『一人息子』の項参照。

三府【さんぷ】（のぞきからくり）『長屋紳士録』の項参照。

武夫【ますらを】（のぞきからくり）『長屋紳士録』ののぞきからくりでは「武士」となっている。誤記か。また、「川島武男」を「川島武夫」（別項）としているので、名前にますらおを掛けているか。

片岡子爵【かたおかししゃく】（のぞきからくり）『長屋紳士録』の項参照。

片岡浪子【かたおかなみこ】（のぞきからくり）『長屋紳士録』の項参照。

海軍少尉【かいぐんしょうい】（のぞきからくり）旧日本海軍の階級。尉官のひとつ。士官の最下級。

川島武夫【かわしまたけお】（のぞきからくり）川島武男の誤記か。『長屋紳士録』の「川島武男」の項参照。

伊香保【いかほ】（のぞきからくり）『長屋紳士録』、『秋日和』の項参照。

逗子【ずし】（のぞきからくり）『長屋紳士録』の項参照。

千鳥の曲【ちどりのきょく】（『全集』）箏曲。二世吉沢検校作曲。

東支那海【ひがししなかい】（台詞）東シナ海。中国東方の海域。長江（揚子江）河口以北の黄海と接する。

支那大陸【しなたいりく】（台詞）中国大陸。

イラワヂ河【いらわじがわ】（台詞）イラワジ川。ビルマ最大の川。エーヤワディー川。ヒマラヤを源流としてビルマを南北に貫流しマルダバン湾に注ぐ。

シャン州【しゃんしゅう】（台詞）ビルマ東部の州。

サルウィン河【さるうぃんがわ】（台詞）サルウィン川。チベットから中国雲南省、ビルマを通りマルダバン湾

へ注ぐ。

印度【いんど】（台詞）　インド。

英軍【えいぐん】（台詞）　イギリス軍。

日本軍【にほんぐん】（台詞）　日本の軍隊。

蒋介石【しょうかいせき】（台詞）　一八八七～一九七五年。中華民国の政治家・軍人。

ビルマ・ルート【びるま・るうと】（台詞）　援蒋ルートのひとつ。日中戦争・第二次世界大戦中、アメリカ・イギリス・ソ連など連合軍側は、対日戦争を戦っていた蒋介石の中華民国を軍事援助するための物資輸送ルート（援蒋ルート）を設けていた。ここにいうビルマ・ルートはラングーンから中国雲南省昆明・四川省重慶（現在重慶は直轄市で四川省に含まれない）に至るルート。「ビルマ・ルートはマンダレーを起点として重慶に通じているんだ。ミイトキーナから保山を通って行くやつ、このバーモから騰越を通って行くやつ、それからラシオから龍陵を通って行くやつの三本だ」（台詞）。

トングー【とんぐう】（台詞）　ビルマの都市名。タウングー。

プロム【ぷろむ】（台詞）　ビルマの都市名。プローム。

トングー・プロムの線【とんぐう・ぷろむのせん】（台詞）　トングー・プロム線。トングーとプロムを結ぶ援蒋ルートの一部。

昆明【こんめい】（台詞）　中国雲南省の都市名。

カルカッタ【かるかった】（台詞）　インドの都市名。

茨城県名賀郡豊浦町字川尻【いばらきけんなかぐんとようらまちあざかわじり】（台詞）　地名。名賀郡は多賀郡の誤植、あるいは『全集』編集者の誤記か。豊浦町は一八八九年から一九五六年まで存在。現在は日立市。

ジフテリヤ【じふてりや】（台詞）　ジフテリア。ジフテリア菌による感染症。

加藤清正【かとうきよまさ】（台詞）　一五六二〜一六一一年。安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将・大名。

英国兵【えいこくへい】（『全集』）　イギリスの兵隊。

新道【しんみち】（台詞）　食傷新道（しょくしょうじんみち）（『秋刀魚の味』の項参照）か。

赤十字【せきじゅうじ】（『全集』）　赤十字社。戦時、負傷者を支援・保護する団体。

印度軍【いんどぐん】（台詞）　インドの軍隊。

印度軍第十七師団【いんどぐんだいじゅうななしだん】（台詞）　インド軍の師団。

アキャブ【あきゃぶ】（台詞）　ビルマの地名。

印度兵【いんどへい】（『全集』）　インドの兵隊。

ビルマ義勇軍【びるまぎゆうぐん】（『全集』）　ビルマ独立義勇軍。南機関が支援・参加したビルマ独立運動軍事組織。日本のビルマ進攻作戦に参加し、イギリス軍と戦う。

岡山【おかやま】（台詞）　ここでは岡山県岡山市。

広東【かんとん】（台詞）　中国南部の省。省都は広州。ここでは広州か。

お多福豆【おたふくまめ】（台詞）　大粒のソラマメを鉄剤を添加し煮たもの。黒くなる。商品名にも。

日本【にほん（にっぽん）】（台詞）　日本国。
ミイトキーナ【みいときいな】（台詞）　ビルマの地名。
保山【ほざん】（台詞）　中国雲南省の都市名。
バーモ【ばあも】（台詞）　ビルマの地名。
騰越【とうえつ】（台詞）　中国雲南省の地名。
ラシオ【らしお】（台詞）　ビルマの地名。ラーショー。
龍陵【りゅうりょう】（台詞）　中国雲南省の都市名。
宮城【きゅうじょう】（台詞）　皇居の呼称。一八八八年から一九四八年まで。
大東亜戦争【だいとうあせんそう】（台詞）　太平洋戦争の同時代の呼称。
サルウィン【さるうぃん】（台詞）　サルウィン川。「サルウィン河」の項参照。
シッタン【しったん】（台詞）　シッタン川。マルダバン湾へ注ぐビルマの川。

『月は上りぬ』（一九五五年）

白黒百二分
一月八日公開
田中絹代監督の日活作品

フィルム・脚本現存（ここでは脚本のみ扱う）

企画　監督協会
制作　児井英生
脚本　斎藤良輔・小津安二郎
監督　田中絹代
撮影　峰重義
美術　木村威夫
音楽　斎藤高順

配役

浅井茂吉（六二、三歳）　笠智衆
浅井千鶴（三〇―二歳）　山根寿子
浅井綾子（二五、六歳）　杉葉子
浅井節子（二〇歳）　北原三枝
安井昌二（三〇―二歳）　安井昌二
雨宮渉（四〇―二歳）　三島耕

高須俊介（四〇―二歳）　佐野周二
田中豊（三〇―二歳）　増田順二
浅井家女中文や（二一、二歳）　小田切みき
禅寺の住持慈海（五七、八歳）　汐見洋

節子【せつこ】（キャスト・台詞・『全集』）『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』の項、『お早よう』の「節子さん」の項参照。

昌二【しょうじ】（キャスト）『戸田家の兄妹』の戸田昌二郎、ひいては小津安二郎に通ずる。

雨宮【あまみや】（キャスト・『全集』・台詞）『戸田家の兄妹』の雨宮夫妻、『風の中の牝鶏』の雨宮家に通ずる。さらにいえば、「雨宮」には「間宮」（『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』の項参照）が包含されている。

奈良【なら】（『全集』）『晩春』の項参照。

三笠【みかさ】（『全集』）三笠山。奈良県奈良市。御蓋山、御笠山とも。

御蓋【みふた】（『全集』）御蓋山。奈良県奈良市。三笠山、御笠山とも。

春日【かすが】（『全集』）春日山。奈良県奈良市。花山もしくは三笠山（三蓋山）を指す場合、あるいはこの両山に加え香山、芳山と連なる連山の総称とする場合がある。

高円【たかまど】（『全集』）高円山。奈良県奈良市。

東京【とうきょう】（台詞）『大学は出たけれど』、『美人哀愁』、『東京の合唱』、『東京の女』、『出来ごころ』、『箱

入娘』、『東京の宿』、『一人息子』、『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『父ありき』、『長屋紳士録』、『風の中の牝鶏』、『晩春』、『宗方姉妹』、『麦秋』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『東京暮色』、『彼岸花』、『浮草』、『小早川家の秋』、『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』の項参照。

大阪【おおさか】（台詞）『宗方姉妹』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『彼岸花』、『浮草』、『小早川家の秋』の項参照。

阪大【はんだい】（台詞）『彼岸花』、『小早川家の秋』の項参照。

節子さん【せつこさん】（台詞）『お早よう』の項参照。

鵠沼【くげぬま】（台詞）　神奈川県藤沢市の一部。

浦和【うらわ】（台詞）　埼玉県浦和市。かつての県庁所在地。二〇〇一年、大宮市・与野市と合併しさいたま市となる。

高等学校【こうとうがっこう】（台詞）　旧制高等学校。

女学校【じょがっこう】（台詞）　旧制女学校。

麹町【こうじまち】（台詞）『淑女は何を忘れたか』の項参照。

高輪【たかなわ】（台詞）　東京都港区の地名。

三笠山【みかさやま】（『全集』・台詞）「三笠」の項参照。

ショパン【しょぱん】（台詞）　ポーランドの作曲家。一八一〇～四九年。

半蔵門【はんぞうもん】（台詞）　皇居（江戸城）の西側にある門。転じてその周辺。

お濠端【おほりばた】『宗方姉妹』、『お茶漬の味』の「お堀端」の項参照。

銀座【ぎんざ】（台詞）『朗らかに歩め』、『足に触った幸運』、『青春の夢いまいづこ』、『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『晩春』、『麦秋』、『東京物語』、『東京暮色』、『彼岸花』、『秋日和』の項参照。

法隆寺【ほうりゅうじ】（台詞・『全集』）『宗方姉妹』の項参照。

大黒屋【だいこくや】（『全集』）旅館大黒屋。奈良県生駒郡斑鳩町に実在する。

夢殿【ゆめどの】（『全集』）法隆寺東院の正堂。奈良県生駒郡斑鳩町。

京都【きょうと】（台詞・『全集』）『晩春』、『宗方姉妹』、『小早川家の秋』の項参照。

木屋町【きやまち】（台詞）木屋町通。京都市を南北に貫く通り。

南座【みなみざ】（台詞）京都四條南座。京都市東山区にある劇場。歴史は江戸時代元和年間まで四〇〇年ほど遡り、歌舞伎発祥の伝統を伝える。

音羽屋【おとわや】（台詞）歌舞伎俳優・尾上菊五郎、坂東彦三郎系統が用いる屋号。ここでは六代目尾上菊五郎（『鏡獅子』の項）。

宮津【みやづ】（台詞）京都府宮津市。宮津湾と栗田湾に面する。

天の橋立【あまのはしだて】（台詞）京都府北部、宮津湾西部にある名勝。宮城県の松島、広島県の宮島（厳島）と並ぶ日本三景のひとつ。

百済観音【くだらかんのん】（台詞）法隆寺（別項）所蔵の観世音菩薩立像。

宵待草【よいまちぐさ】（台詞）大正時代の歌曲。竹久夢二作詞・西條八十補作／多忠亮作曲。

博物館【はくぶつかん】（台詞）　京都国立博物館。京都市東山区。

大仏殿【だいぶつでん】（『全集』・台詞）　東大寺大仏殿。奈良県奈良市。盧舎那仏坐像を安置。

二月堂【にがつどう】（台詞・『全集』）　東大寺二月堂。奈良県奈良市。

「林檎の気持はよく分る」【りんごのきもちはよくわかる】（台詞）「リンゴの唄」（サトハチロー作詞／万城目正作曲／並木路子・霧島昇歌）の歌詞の一部。佐々木康『そよかぜ』（一九四五年）の挿入歌。

西大寺【さいだいじ】（台詞）　真言律宗の総本山。奈良県奈良市。

公園【こうえん】（台詞・『全集』）　奈良公園。奈良県奈良市。

モウパッサン【もうぱっさん】（台詞）　モーパッサン。フランスの小説家。一八五〇～九三年。

Moon-light【むうんらいいと】（台詞）　モーパッサン「月光」。

サマセット・モーム【さませっと・もおむ】（台詞）　イギリスの小説家。一八七四～一九六五年。

三七五五【さんななごご】（台詞）『万葉集』三七五五番。

三千七百五十五【さんぜんななひゃくごじゅうご】（台詞）『万葉集』三千七百五十五番。

猿沢の池【さるさわのいけ】（台詞）　興福寺（奈良県奈良市）の南にある人工池。

六百六十六【ろっぴゃくろくじゅうろく】（台詞）『万葉集』六百六十六番。

六六六【ろくろくろく】（台詞）『万葉集』六六六番。

高瀬川【たかせがわ】（『全集』）　鴨川の水を分岐し、宇治川に注ぐ運河。京都市中京区から伏見区。全長約十キロメートル。

万葉集【まんようしゅう】（台詞）　現存最古の和歌集。奈良時代成立。
うるはしと吾が思ふ妹を山川を中に隔りて安けくもなし【うるわしとあがもふいもをやまかはをなかにへなりてやすけくもなし】（台詞）『万葉集』（前項）三七五五。
相見ぬは幾く久もあらなくに幾許吾は恋ひつつもあるか【あいみぬはいくばくひさもあらなくにここだくあれはこいつつもあるか】（台詞）『万葉集』（前々項）六六六。
坂上郎女【さかのうえのいらつめ】（台詞）　大伴坂上郎女。奈良時代の女流歌人。生没年不詳。
英語【えいご】（台詞）　イギリスの言語。アメリカ、旧イギリス植民地をはじめ世界中で使用されている。
鴨川【かもがわ】（『全集』）　京都市を北から南へ流れる一級河川。

『青春放課後』（一九六三年）

ＮＨＫテレビ白黒八十九分
三月二十一日放映
ビデオ・脚本現存

制作企画　山内大輔
原作・脚色　里見弴・小津安二郎

演出　畑中庸生・小中陽太郎・久米昭二・山本一次
装置　小川和夫
効果　富田純孝

配役
山口信吉　宮口精二
山口ふみ　三宅邦子
緒方省三　北龍二
緒方あや子　杉村春子
長谷川一郎　佐田啓二
佐々木せい　西口紀代子
佐々木千鶴　小林千登勢
長谷川の女（京子）　稲野和子
金子　高橋幸治
妻三枝子（千鶴の友人）　環三千世
バー・マダム　南美江
バーテン　菅野忠彦

宿の女中（箱根）　宮内順子
宿の女中（京都）　堀江璋子
風呂番（箱根）　奥野匡
男衆（箱根）　有沢陽司
料亭のおかみ（はつ）　藤代佳子
ローガン　マイク・ダニーン
「竹川」の女中　栗栖京子
緒方家の女中　悠木千帆

里見弴【さとみとん】（クレジット）　冒頭のクレジット。「テレビドラマ」に続き「青春放課後／里見弴」。続いて八坂の塔（次項）の映像になり、そこに「脚本／里見弴／小津安二郎」とクレジットが重なる。冒頭に里見弴の名が出るのはＮＨＫの配慮か、小津の配慮か。

八坂の塔【やさかのとう】（映像）　東山の塔（『晩春』の項参照）。

清水寺【きよみずでら】（映像）　『晩春』の項参照。

文学座【ぶんがくざ】（クレジット）　日本の劇団。一九三七年、岸田国士、久保田万太郎、岩田豊雄により設立。杉村春子、中村伸郎、宮口精二、岸田今日子など小津映画の出演者も所属していた。

斎藤高順【さいとうたかのぶ】（クレジット）　「音楽／斎藤高順」。作曲家・指揮者。『お茶漬の味』から小津の映

画音楽を担当。『早春』で小津の意を体し、「サセレシア」を作曲。のちに航空自衛隊航空中央音楽隊長（二等空佐（中佐に相当））、警視庁音楽隊長を歴任。

小川和夫【おがわかずお】（クレジット）「装置／小川和夫」。

中藤宗二【なかふじそうじ】（クレジット）「技術／中藤宗二」。

富田純孝【とみたすみたか】（クレジット）「効果／富田純孝」。

畑中庸生【はたなかつねお（ようせい）】（クレジット）「演出／畑中庸生」。

京都【きょうと】（『全集』・台詞）『晩春』、『宗方姉妹』、『小早川家の秋』の項参照。

東山【ひがしやま】（『全集』）『晩春』、『彼岸花』、『小早川家の秋』の項参照。

都をどり【みやこおどり】（映像）冒頭、街角にポスター。毎年四月、京都祇園の歌舞練場で行われる舞踊会。一八七二年から。

ヨド【よど】（台詞）よど。一九六一年から東京・大阪間を七時間半で結んだ急行電車の愛称。

アメリカ【あめりか】（台詞）アメリカ合衆国。

ヨーロッパ【よおろっぱ】（台詞）ユーラシア大陸北西に位置する半島部。ヨーロッパ大陸。

箱根【はこね】（台詞・『全集』）『父ありき』、『宗方姉妹』、『早春』、『彼岸花』の項参照。

若狭鰈【わかさがれい】（台詞）ヤナギムシガレイの生干し。福井県若狭湾の名物。笹ガレイ、甘ガレイとも。

東京【とうきょう】（台詞）『大学は出たけれど』、『美人哀愁』、『東京の合唱』、『東京の女』、『出来ごころ』、『箱入娘』、『東京の宿』、『一人息子』、『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『父ありき』、『長屋紳士録』、『風の

中の牝鶏』、『晩春』、『宗方姉妹』、『麦秋』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『東京暮色』、『彼岸花』、『浮草』、『小早川家の秋』、『ビルマ作戦　遥かなり父母の国』の項参照。

高台寺【こうだいじ】（『全集』・台詞）　京都市東山区にある臨済宗建仁寺派の寺院。一六〇六年、北政所（高台院）が建立。

麩屋町【ふやちょう】（『全集』）　麩屋町通り。京都市中心を南北に貫く通り。平安京の富小路に相当。

茨木屋【いばらきや】（『全集』）　ここでは旅館の名。

河原町【かわらまち】（台詞）　京都市の繁華街。

西陣【にしじん】（台詞）　京都市上京区から北区あたりの呼称。西陣織発祥地。

日本酒【にほんしゅ】（台詞）　米・麹・水を原料とする醸造酒。清酒。

洋酒【ようしゅ】（台詞）　西洋の酒。ヨーロッパ・北アメリカ由来の酒。ウィスキー・ブランデーなどの蒸留酒を指すのが普通。ワイン・ビールは含まないことが多い。

サントリーオールド【さんとりいおおるど】（映像）　『彼岸花』、『秋刀魚の味』の項参照。

祇園【ぎおん】（台詞）　京都市東山区の繁華街。

丸山【まるやま】（台詞）　円山の誤記か。京都市東山区円山町の円山公園。

明治【めいじ】（台詞）　明治時代。一八六八～一九一二年。

大正【たいしょう】（台詞）　大正時代。一九一二～一九二六年。

芦ノ湖【あしのこ】（映像）　『父ありき』、『彼岸花』の項参照。

宮ノ下【みやのした】（『全集』）　神奈川県箱根町宮ノ下。宮ノ下温泉。富士屋ホテルがある。

伊賀流【いがりゅう】（台詞）　忍術の流儀のひとつ。

甲賀流【こうがりゅう】（台詞）　忍術の流儀のひとつ。

アメリカ人【あめりかじん】（台詞）　アメリカ合衆国の人。

佐々木【ささき】（台詞）　『彼岸花』の項参照。

コッテ【こって】（台詞）　コッテ牛（次項）参照。

コッテ牛【こってうし】（台詞）　農作業に使う丈夫な牡牛。

東京駅【とうきょうえき】（台詞）　『晩春』、『麦秋』、『東京物語』、『彼岸花』の項参照。

宇治川【うじがわ】（台詞）　京都市内を流れる淀川の通称。

宇治【うじ】（台詞）　京都府宇治市。

花屋敷【はなやしき】（台詞）　宇治（前項）にある旅館。花やしき浮舟園。

「大日本の歌」【だいにほんのうた】（歌）　芳賀秀次郎作詞／橋本国彦作曲、一九三八年。山口が箱根の宿の風呂で歌っている。「雲湧けり雲湧けり緑島山／潮満つる潮満つる東の海に／この国ぞ高光る天皇（すめらみこと）／神ながら治しめす皇御国（すめらみくに）／ああ吾等今ぞ讃へん声もとどろに／類なき古き国がら若き力を」。山口は「高光る」の前に「おお」と入れ、「皇御国（すめらみくに）」まで歌っている。『全集』は「雲はれて　雲はれて／緑島山　潮満る／東の国に　この国ぞ〈〈／高光る　かんなめす」としている。脚本の誤記か。

緑島山【みどりしまやま】（台詞）　「大日本の歌」（前項）の歌詞の一部。

本郷森川町【ほんごうもりかわちょう確認】（『全集』）　東京都文京区にかつてあった地名。現・文京区本郷六丁目。

バイエル【ばいえる】（ＢＧＭ）『彼岸花』、『秋刀魚の味』の項参照。

ピアノの練習曲【ぴあののれんしゅうきょく】（『全集』）　バイエル（前項）参照。

仙台【せんだい】（台詞）『父ありき』の項参照。

リラ【りら】（台詞・『全集』・映像）　バーの名。

西銀座【にしぎんざ】（台詞）『宗方姉妹』、『麦秋』、『お茶漬の味』、『東京暮色』、『彼岸花』、『お早よう』、『秋刀魚の味』の項参照。

日本語【にほんご】（台詞・『全集』）　日本の言葉。

銀座【ぎんざ】（映像・『全集』）『朗らかに歩め』、『足に触った幸運』、『青春の夢いまいづこ』、『淑女は何を忘れたか』、『戸田家の兄妹』、『晩春』、『麦秋』、『東京物語』、『東京暮色』、『彼岸花』、『秋日和』、『月は上りぬ』の項参照。

赤坂【あかさか】（台詞・『全集』）　東京都港区の地名。『戸田家の兄妹』の項参照。

二条の堀川【にじょうのほりかわ】（テレビの台詞）　二条堀川（次項）参照。

二條堀川【にじょうほりかわ】（台詞）　京都市中京区の地名。

女学校【じょがっこう】（台詞）　京都市立堀川高等女学校（一九〇八～四八年）か。四八年、京都市堀川高等学校となり現在に至る。佐々木千鶴が通っていたのは、共学になった堀川高校であるが、長谷川は以前の印象が

強く女学校といっている。

こう寿軒【こうじゅけん】（テレビの台詞）　物語内の菓子屋。

番寿軒【ばんじゅけん】（台詞）　物語内の菓子屋。

二松【にしょう】（テレビの台詞）　二松学舎大学。

一高【いちこう】（台詞）　第一高等学校。

六本木【ろっぽんぎ】（台詞・映像・『全集』）　東京都港区の地名。

チャンソバ屋【ちゃんそばや】（台詞・『全集』）　『秋刀魚の味』の項参照。

東京タワー【とうきょうたわあ】（映像）　『秋日和』の項参照。

支那【しな】（『全集』）　中国。

支那料理【しなりょうり】（『全集』）　中華料理。

華【か】（映像）　暖簾の文字。中華の一部。

中華料理【ちゅうかりょうり】（映像）　中国の料理。

中華料理白荘（？）【ちゅうかりょうりはくそう】（映像）　店内貼り紙。

支那そば【しなそば】（『全集』）　ラーメン。

大阪【おおさか】（台詞）　『淑女は何を忘れたか』、『宗方姉妹』、『お茶漬の味』、『東京物語』、『早春』、『彼岸花』、『浮草』、『小早川家の秋』の項参照。

目白【めじろ】（台詞）　東京都豊島区の地名。

叡山【えいざん】（台詞）　比叡山。

近江舞子【おおみまいこ】（台詞）　琵琶湖岸の浜。滋賀県大津市（テレビ放映時は滋賀県滋賀郡志賀町）。

洋菓子【ようがし】（『全集』）　西洋に由来する菓子。

イクレヤ【いくれや】（台詞）　洋菓子の名称。シュークリームのバリエーション。細長のシューの上にチョコレートが塗られている。

柏屋【かしわや】（台詞）　不詳。金子が「イクレヤ」（前項）を買った菓子店。

唐紙【からかみ】（『全集』・映像）　『瓦版かちかち山』の項参照。

ショートホープ【しょおとほおぷ】（映像）　『秋刀魚の味』の項参照。

赤坂田町【あかさかたまち】（『全集』）　東京都港区の地名。

英語【えいご】（『全集』）　イギリスの言葉。

オールドパー【おおるどぱあ】（映像）　『母を恋はずや』の項参照。

横浜【よこはま】（台詞）　『晩春』、『お茶漬の味』の項参照。

『大根と人参』（覚書）

ゲーテ【げえて】（『全集』）　ドイツの詩人・小説家・劇作家。一七四九～一八三二年。

「何がいやしいかと言って人の不幸を喜ぶ程、人間としていやしいことはない」【なにがいやしいかといってひと

のふこうをよろこぶほど、にんげんとしていやしいことはない】（『全集』） ゲーテの言葉。出典不詳。

六高【ろくこう】（『全集』） 旧制第六高等学校。岡山県岡山市。

敦賀【つるが】（『全集』） 京都府の港湾都市。

宮津【みやづ】（『全集』） 『月は上りぬ』の項参照。

岡潔【おかきよし】（『全集』） 数学者。一九〇一～七八年。

ＮＨＫ【えぬえいちけえ】（『全集』） 日本放送協会。

大鵬【たいほう】（『全集』） 大鵬幸喜。（一九四〇～二〇一三年）。大相撲力士。第四十八代横綱。幕内最高優勝三十二回。柏戸（次項）とともに柏鵬時代を築く。「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語を生むほどの人気を誇った。

柏戸【かしわど】（『全集』） 柏戸剛。（一九三八～九六年）。大相撲力士。第四十七代横綱。幕内最高優勝五回。大鵬（前項）とともに柏鵬時代を築く。

「青年と老年」【せいねんとろうねん】（『全集』） 「年をとってみると、物事に好奇心を失い、言わば貧すりゃ鈍するといった惰性的な道をいつの間にかいくようだ。いつのまにか鈍する道をうかうかと行きながら、次第に円熟して行くと思い込む。そんなことにもなりかねない」と「小林秀雄」（次項）の言葉として書かれる。「青年と老年」（『朝日新聞』一九六三・一・五）の一部。当該部分小林の文章は「さて年齢を重ねてみると、やはり、次第に物事に好奇心を失い、言わば貧すれば鈍すると言った惰性的な道を、いつの間にか行くようだ。のみならず、いつの間にか鈍する道をうかうかと歩きながら、当人は次第に円熟して行くとも思い込む、そんな事にも

成りかねない」（ここでの引用は『考えるヒント』一九七四・六、文春文庫）である。小津の文章は要約というより引用だが、正確ではない。だが、その異同から、小津の言葉ぐせが窺える。たとえば「貧すれば鈍する」を「貧すりゃ鈍する」としているところなど。中村伸郎の口調など響いてくるではないか。

小林秀雄【こばやしひでお】（『全集』）　評論家。一九〇二～八三年。

2013年10月16日　上海交通大学外国語学院講演会（上海交通大学閔行キャンパス）

小津安二郎と志賀直哉

日本国北海道武蔵女子短期大学教授　中　澤　千磨夫

你好。こんにちは、皆さん。中澤千磨夫（Nakazawa Chimao）と申します。日本の北海道からやってまいりました。北海道へは中国の方々もたくさん観光で見えられます。とりわけ馮小剛（フォン・シャオガン）監督の『非誠勿擾（フェイチェンウーラオ）』（邦題「狙った恋の落とし方」）（2008年）が御国で大ヒットして以来、北海道へ来られる方が大変多くなりました。今日取り上げます志賀直哉（1883～1971年）の短編小説に「網走まで」（1910年）という作品があります。この作品には網走が直接描かれているわけではありません。場所は栃木県の宇都宮です。語り手「自分」が汽車（中国語では火車ですね）で乗り合わせた母子がおりまして、その母が遠い北海道の網走まで行くという話をするのです。『非誠勿擾』では網走が重要な舞台となっております。もうひとつの映画について紹介します。篠原哲雄監督の『スイートハート・チョコレート（甜心巧克力）』（2013年）という作品です。上海と北海道の夕張が舞台となっている切ない恋物語。ヒロインを台湾の林志玲（リン・チーリン）が演じています。私はこの2月にゆうばり国際ファンタスティック映画祭で観ました。素晴らしい作品です。上海では来月公開予定（後記11月8日）と聞いております。観に行ってくだされば幸いです。

さて、今日は「小津安二郎と志賀直哉」と題してお話しいたします。主として、小津安二郎の視点からになります。映画監督・小津安二郎は１９０３年12月12日、東京の下町・深川で生まれました。１９６３年12月12日、満60歳の誕生日に東京は御茶ノ水の東京医科歯科大学附属病院で亡くなりました。喉の癌でした。今年は生誕１１０年、没後50年に当たります。小津は生涯に54本の作品を撮りました。不完全なものを含めれば、現在そのうちの37作品を観ることが出来ます。映画を芸術作品とは見做さず保存の手段を講じてこなかった日本の事情を考えれば、小津は奇跡的に幸福な映画監督といえます。

早くから海外で評価された黒澤明（１９１０～98年）と比べ小津の評価は遅れました。黒澤の動的なスタイルに対し、静的な日本の家族ドラマに終始した（サイレント時代はそうとも限らないのですが）小津を海外の映画祭に出品することに所属映画会社の松竹は消極的でした。１９５８年のロンドン映画祭で第１回サザーランド賞(Sutherland Trophy)が与えられたことを除けば、赫奕たる評価は死後のことになります。ちなみに、サザーランド賞は１９６７年に小林正樹『上意討ち拝領妻始末』（１９６７年）、１９７６年に大島渚『愛のコリーダ』（１９７６年）、１９８７年に上海生まれのエドワード・ヤン（楊徳昌）『恐怖分子（恐怖份子）』（１９８６年）などが受賞しています。

ドナルド・リチーなどの評論家により、小津安二郎はヨーロッパや東アジアを中心に評価され始め、多くの映画監督の卵たちが小津の影響を受けます。周防正行、ヴィム・ヴェンダース、アキ・カウリスマキ、侯孝賢（ホウ・シャオシェン）、先に挙げたエドワード・ヤンなど世界的に評価を受ける監督たちが「小津の子どもたち」と呼ばれるようになります。

世界映画のオールタイムベストテンとして最も権威あるとされているのが、イギリスの『Sight & Sound』誌が10年毎に選出するものです。このベストテンは１９５２年に、世界各国の映画評論家の投票により開始されました。日本映画の作品で最初に選ばれたのは、１９６２年の溝口健二『雨月物語』（１９５３年）で第４位にランクインしました。『雨月物語』は１９７２年にも第10位に入ります。１９８２年には黒澤明『七人の侍』（１９５４年）が第３位に選ばれました。１９９２年には小津安二郎『東京物語』（１９５３年）が第３位に入ります。この１９９２年からは映画監督が投票する部門も加わり、そちらでは黒澤の『七人の侍』と『羅生門』（１９５０年）が第10位に入りました。続く２００２年の投票。評論家部門で『東京物語』が第５位、映画監督部門で『七人の侍』、『羅生門』が第９位となりました。そして、２０１２年。『東京物語』が評論家部門で第３位、映画監督部門で第１位に選ばれたのです。小津安二郎が世界一と認められました。ちなみに評論家部門トップファイブを挙げれば、１位アルフレッド・ヒッチコック『めまい』（１９５８年）、２位オーソン・ウェルズ『市民ケーン』（１９４１年）、４位ジャン・ルノワール『ゲームの規則』（１９３９年）、５位Ｆ・Ｗ・ムルナウ『サンライズ』（１９２７年）。映画監督部門では、２位スタンリー・キューブリック『２００１年宇宙の旅』（１９６８年）、３位『市民ケーン』、４位フェデリコ・フェリーニ『８　１／２』（１９６３年）、５位マーチン・スコセッシ『タクシー・ドライバー』（１９７６年）です。

前置きが長くなりましたが、本題に入りましょう。早くからハリウッド映画に親しんでいた小津安二郎は文学作品もよく読んでいました。現存作品として最も古い『学生ロマンス　若き日』（１９２９年）は大学生生活を描いた喜劇ですが、学生の部屋の本箱に新潮社の『世界文学全集』が７冊ほど入っています。小津安二郎という作

家は、画面に写し込まれる小物についてけして疎かにしません。新潮社の全集は当時ベストセラーになっていたいわゆる円本（一冊一円の予約出版で作家の生活を潤しました）の一種で、小津自身が読んでいたものを小道具として使用したという可能性も十分です。やはり大学生生活に材を取り、治安維持法をギャグにし、マルクスの肖像を登場させた冒険作『淑女と髯』（１９３１年）にも当時配本され始めた第一次『漱石全集』が男爵家に置かれています。のちの『淑女は何を忘れたか』（１９３７年）にも第二次『漱石全集』が登場します。トーキー、つまり音の出る映画第１作である『一人息子』（１９３６年）は芥川龍之介（１８９２〜１９２７年）の「人生の悲劇の第一幕は親子となったことにはじまっている」（『侏儒の言葉』１９２３〜27年）というアフォリズムから始まります。女手ひとつで大学まで行かせた一人息子が東京に出たものの、思うに任せぬ人生を送っています。息子の出世を楽しみに信州（長野県）から上京した母の絶望が描かれたこの作品には小津の文学趣味がよく表れています。『父ありき』（１９４２年）では父親と塩原温泉を訪れた息子が岩波文庫を読んでいます。画面から作品名を特定することは無理なのですが、大胆な類推をすれば、志賀直哉『暗夜行路』の可能性が十分にあります。

小津安二郎は１９３７年９月に召集され、１９３９年７月まで中国大陸を転戦しました。上海、南京、徐州、九江（小津はしゃれて nine river と呼びました）、南昌（同じく south day day）などです。私は２００５年3月、小津の戦跡調査のため、上海、南京、徐州、開封などを歩きました。その際の大きな収穫をひとつ紹介します。小津に大きな影響を与えた山中貞雄（１９０９〜38年）という後輩映画監督がいます。小津と時を同じくして中国大陸を転戦していたのですが、開封の野戦病院で戦病死しました。急性腸炎でした。１９３８年1月12日、その山中を小津が訪ねました。それは南京東方の句容であったというのが定説になっていたのですが（現在でもほ

とんどの文献が句容を踏襲したままです。小津日記の記述が「句容」となっているからです）、２００５年の調査で、句容ではなく、南京郊外の湯山鎮（当時の日本側資料の多くは湯水鎮と記述）の砲兵学校（現在は人民解放軍南京砲兵学院）であることを、私は明らかにしました。湯山鎮には２０１２年3月4月の戦跡調査でも再訪しました。２０１２年調査では上海交通大学の呉保華先生、陸徳陽先生に大変お世話になりました。また、通訳として帯同してくれた当時大学院生だった朱曄さんにはおおいに助けてもらいました。その時のご縁で今こうしてお話しさせていただいている次第です。２０１２年には小津らが渡河作戦を決行した修水河を訪れましたが、学術調査のためにそんな所まで行った日本人は、おそらく私たちだけだろうと思います。

小津安二郎は南昌作戦後の１９３９年5月9日の日記にこう記しています。「夕方から安義まで道普請。この二三日前から暗夜行路を読む。岩波文庫で、前篇は二度目だつたが後篇ハ始（初）めてで激しいものに甚だうたれた。これハ何年にもないことだつた。誠に感ず」（田中眞澄編纂『全日記小津安二郎』１９９３年、フィルムアート社）と。5月17日には九江から安慶行きの汽船に乗り、「時任謙作屋島行のくだりがしきりに思ひだされる。もう読み終つて〈暗夜行路〉、十日程にもなるのに、神韻縹渺とでもいふのであらうか、未だに新しい感動を覚へて快い」（同前）と記します。小津は戦地で文学作品や総合雑誌をよく読んでおりますが、リクエストして家から送ってもらっていたのでしょう。戦地で「甚だうたれた」志賀直哉の『暗夜行路』を復員後第2作の『父ありき』に小道具として使ったと推測することにそれほど無理はありません。

次に、小津作品の登場人物名について触れます。小津映画のヒロインの名で最もよく知られているのは、いわゆる小津調のピークを成すとされている『晩春』（１９４９年）、『麦秋』（１９５１年）、『東京物語』における「紀

子」です。原節子が演じました。原節子は小津の死に殉ずるかのように引退してしまった伝説の女優です。「紀子」は『小早川家の秋』の司葉子に引き継がれます。この名は小津が可愛がっていた姪（弟・信三・ハマ夫妻の子）の亜紀子の名に由来すると思われます。原節子が『秋日和』（１９６０年）、『小早川家の秋』（１９６１年）で演じたのは漢字こそ違え「秋子」です。また『東京暮色』（１９５７年）では有馬稲子が「明子」、『秋刀魚の味』（１９６２年）では岡田茉莉子が「秋子」を演じています。このように、小津は身近な人物の名を役名に借りることが多くありました。節子という役名も何度か登場します。まずは『淑女は何を忘れたか』で桑野通子がこの名を負って登場します。ついで『戸田家の兄妹』（１９４１年）の高峰三枝子、『宗方姉妹』（１９５０年）の田中絹代、『お茶漬の味』（１９５２年）の津島恵子、『彼岸花』（１９５８年）の有馬稲子、『お早よう』（１９５９年）の久我美子です。戦後作品では原節子主演作の穴を埋めるように「節子」という役名のヒロインが登場しており、小津がいかに原節子に執心していたかが分かります。原節子は山中貞雄『河内山宗俊』（１９３６年）のヒロインで、山中が小津に原節子の起用を頼んだというエピソードもあります。

「時子」という役名も気になります。まずは『非常線の女』（１９３３年）です。ヒロインは日本女優史に燦然と輝く女優の中の女優・田中絹代。ついで『淑女は何を忘れたか』の栗島すみ子、『戸田家の兄妹』の桑野通子、そして『風の中の牝鶏』（１９４８年）では再び田中絹代です。桑野通子は溝口健二『女性の勝利』（１９４６年）の撮影中31歳の若さで子宮外妊娠により亡くなりました。桑野通子が存命なら「紀子」役は原節子に回らなかったかもしれません。田中絹代、桑野通子、そして原節子と続く小津映画のヒロインの流れがあります。田中絹代は戦前の娘役から、戦後の妻役、老婆役と脇にも回り女優人生を全うしました。最晩年、肺癌・脳腫瘍を患い、

失明しても出来る役があるだろうかといったというエピソードは凄絶です。

この「時子」という役名は志賀直哉の「ある男、その姉の死」（１９２０年）の姉の名に由来するのではないでしょうか。むろん、『暗夜行路』（１９２１～37年）の「時」任謙作も連想させます。『麦秋』で紀子と結ばれる「謙吉」も時任「謙」作でしょう。さらに『大学よいとこ』（１９３６年）（この作品はフィルムが失われておりますが、脚本は残っています）と『淑女は何を忘れたか』の「千代子」は志賀直哉『大津順吉』（１９１２年）、『ある男、その姉の死』の女中・千代から来ているでしょうか。文学作品に馴染んでいた小津が志賀作品の登場人物名を借りていたのです。

小津は敗戦をシンガポールで迎えます。陸軍の報道部映画班員として１９４３年6月から滞在し、戦後は抑留されていました。映画撮影のために行ったのですが、結局映画は撮られず、軍が接収したハリウッド作品を観ていました。オーソン・ウェルズ『市民ケーン』（１９４１年）、ウォルト・ディズニー制作のベン・シャープスティーン『ファンタジア』（１９４０年）、ビクター・フレミング『風と共に去りぬ』（１９３９年）などです。

１９４６年2月復員し、復帰第1作は戦後焼け跡の人情を描いた『長屋紳士録』（１９４７年）です。その『長屋紳士録』の試写を観て、志賀直哉、小津ら5人が座談会（実質的には志賀と小津の対談）を行っています（「映画と文学」『映画春秋』6、１９４７・4・15）。戦中戦後の小津日記には失われている部分がありますから、確認出来る限り志賀と小津が会った最初となります。戦時中から志賀と小津の交流が始まったという異説（浜野保樹『小津安二郎』１９９３年、岩波新書）がありますが、貴田庄『小津安二郎文壇交遊録』（２００６年、中公新書）は、これを丁寧に否定しています。『志賀直哉全集』に小津の名が記されるのは「『長屋紳士録』をみる」（『スクリー

ン・ステージ』54、１９４７・５・６）が最初です。『長屋紳士録』試写についての感想です。「小津監督の製作態度に純粋な気持が感じられて自分はいい印象を受けた」（『志賀直哉全集　第七巻』岩波書店、１９９９年）としながら、細部には注文も付けています。「純粋」という志賀直哉にとっては最上の価値を有する言葉をもって批評されたことを、小津はどんなに喜んだことでしょう。

その後、志賀書簡、日記などにも小津の名は頻出するようになります。また、志賀は小津映画の宣伝にも一役買いました。『麦秋』を「立派な芸術品」（「麦秋」）１９５１年、『志賀直哉全集　第八巻』岩波書店、１９９９年）、『東京物語』を「嘘がない、いい小説を読んだあとのやうな感銘をうけた。僕が見た小津君の作品の中では壱番いいと思ふ」（「東京物語」）１９５３年、『志賀直哉全集　第九巻』岩波書店、１９９９年）、『東京暮色』を「人生ではかういふ事は、却つて本統にあるのかも知れない」（「東京暮色」）１９５７年、『志賀直哉全集　第十巻』岩波書店、１９９９年）と映画広告で評しました。一方小津も、新書版『志賀直哉全集』（全17巻、岩波書店、１９５５～56年）の推薦文をパンフレットに書いています。こうして戦後、小津は敬愛してやまない志賀直哉と交流を重ねていくことになります。小津は志賀をチョクサイ先生と呼び、最上の敬意を払います。１９５６年6月には志賀、里見弴、小津の三人で浜名湖、蒲郡、京都を旅行するまでになります。小津最初のカラー作品『彼岸花』（１９５８年）には蒲郡が出てきますが、小津にとっては志賀・里見との旅行の記念でもありました。１９５６年6月5日消印の志賀康子宛葉書には「何かと小津君の世話になつてゐる」（『志賀直哉全集　第二十一巻』岩波書店、２０００年）と記しています。

志賀は映画をよく観ていたようで、細かなことについても発言しています。志賀は「小津君のものは小説に近

い（略）観客に迎合しようという、それがもっとも少ないほうじゃないかな」、「映画というものは映画のために拵えたものが結局いちばん面白いね。どうも小説を映画にしたというものは何だか靴を隔てて掻くような気がしてまどるっこしい」（「映画と文学」）などと発言しています。小津作品はほとんどがオリジナル脚本です。志賀と小津を繋いだのは、同じ白樺派で鎌倉に住む里見弴でしょうか。里見の四男・山内（やまのうち）静夫（１９２５年〜）は『早春』（１９５６年）以降の小津松竹作品のプロデューサーを務めます。１９５２年に小津が鎌倉に転居してからは里見との交流はさらに深くなります。

１９５１年４月27日の『全日記小津安二郎』に「茅ヶ崎から大洞台の志賀先生訪問　清水　志賀真津子同道」とあります。大洞台は静岡県の温泉地・熱海です。一時志賀が住んでいました。「清水」は小津と親しかった映画監督・清水宏（１９０３〜66年）でしょう。志賀真津子（１９２５年〜）は志賀直哉が小津に紹介し松竹に入った女優です。芸名は志賀・小津から貰いました。小津作品では『麦秋』、『お茶漬の味』、『秋刀魚の味』に出演しました。志賀直哉は同日の日記に「午后小津安二郎、清水宏、志賀真津子（後藤の嫁高子）来る。今度小津の撮る「麦秋」に女主人公（原節子）の友達の役を貰ったのだ。一年でさういふ役を貰ふ事、小津の特別の好意によるものだらう。小津も清水も恐らく今の新しい小説家よりも芸術家気質強く、話して気持よし。三人夕方帰る」（『志賀直哉全集　第十五巻』岩波書店、２０００）。「午后」から「夕方」までですから、歓談長きに渡ったと考えていいでしょう。

ここで小津作品の舞台について考えます。10代を過ごした三重県松阪、伊勢と30代の中国、40代のシンガポール体験を除き、小津は終生、東京及びその近郊を離れませんでした。そんな小津には抜きがたい東京セントラリ

ズム、東京中心主義があります。数えればきりがありませんが、『麦秋』で謙吉から秋田の病院に移ることを告げられた杉村春子演ずる母親の不機嫌な表情は印象的でした。映画の舞台はほとんどが東京近辺なのですが、登場人物たちに厭われない東京以外の地として『東京物語』の尾道、『麦秋』の奈良、『宗方姉妹』、『小早川家の秋』の京都、『浮草』の志摩などが挙げられます。三重県志摩は小津に縁の土地ですが、尾道・奈良・京都は志賀に深い縁のある土地で、小津にとっても聖地といってよいでしょう。特に尾道は『暗夜行路』の想が成った特別な場所です。ほかにも東京近郊とはいえ、『東京物語』の熱海（志賀が住んでいました）、『麦秋』の宇都宮（志賀の「網走まで」の舞台）など、志賀作品を連想させる場所を使っています。（後記：厳密にいえば、小津は戦前・戦中に『一人息子』や『父ありき』で東京を「異空間として不吉なことの起こる場所」（中澤千磨夫「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――④小津の汽車が走る時」『北海道武蔵女子短期大学紀要』32、２０００年）として描いたこともあります）

さていよいよ、ヒロイン「時子」の祈りを描いた戦後第2作『風の中の牝鶏』についてお話しします。この作品は、小津の『暗夜行路』といっても過言ではありません。先に触れた対談で、志賀は小説の映画化に否定的な発言をしていましたが、豊田四郎『暗夜行路』（１９５９年）を小津は「天に唾吐く行為」（高橋治『絢爛たる影絵――小津安二郎――』１９８２年、文藝春秋）と切り捨てました。『風の中の牝鶏』は、小津と一緒にシンガポールに行っていた斎藤良輔との共同脚本です。内容が暗いためか、同時代の評判は芳しくなく、小津研究史でも失敗作と位置付けられてきました。ひとり佐藤忠男が「戦場での兵士としての」小津の傷を読んでいた（『小津安二郎の芸術　下』朝日選書、１９７８年）のが特筆されます。

ある意味で、この作品の躓きが小津調、小津の絶頂期へのステップとなったのです。小津のデビュー作『懺悔の刃』（１９２７年、フィルムは失われています）など、戦前13本（うち1本は構成）の映画で小津とコンビを組んだ脚本家・野田高悟（１８９３〜１９６８年）が、こんな映画を撮っていては駄目だから一緒に脚本を書こうと申し入れたのです。『風の中の牝鶏』に次ぐ作品が『晩春』で、小津は初めて原節子を起用します。小津・野田のコンビはこれ以降最後の『秋刀魚の味』まで続き、「小津調」と呼ばれることになるのです。それは娘の結婚などを大きなモチーフとするホームドラマなのですが、『早春』（１９５６年）や『東京暮色』（１９５７年）のような深刻なドラマでは、野田はサボタージュして小津を困らせたといいます。つまり、ドラマにおけるシリアスな側面は小津が追求しようとしていたテーマであったということです。『東京暮色』のヒロイン明子は、自分が父の子ではないのではないかという疑念を抱きます。いうまでもなく、これまた『暗夜行路』の大きな影です。

野田は戦前のいわゆる「蒲田・大船調」の確立者の一人で小市民の生活を涙・笑いで描きました。なんといっても特筆されるのは、野村浩将『愛染かつら』（１９３８〜39年）です。すれ違いドラマの大ヒット作品です。前編、後編、続編、完結編と４作品が作られましたが、現在は完全な形で観ることが出来ず、総集編しか残っておりません。大衆芸術を文化財と捉える視点が映画会社・国はもちろん国民にも欠如していましたから、不要となった映画フィルムは廃棄されたり、不完全な管理の下、映画会社の倉庫で劣化してしまったのです。現在、その意識は多少改善されましたが、アーカイブとして映画を残す事業はまだまだ完全ではなく、フィルムの劣化は日々進行しているのです。その意味で、最初に述べたように54本中37作品を観ることが出来る小津安二郎は「奇跡的に幸福な」映画作家なのです。

『風の中の牝鶏』については、私自身いくつかの新しい読み方を提出したつもりです（「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで読む小津安二郎――⑥『風の中の牝鶏』――反復する階段、あるいはプシュケーの祈り――」『北海道武蔵女子短期大学紀要』34、２００２年、短縮して『小津安二郎・生きる哀しみ』ＰＨＰ新書、２００３年）。ここでは作品の細部を含め詳細に論ずる余裕はありませんので、志賀直哉の大きな影響下にこの作品が成立しているという点を中心にお話ししましょう。

東京の下町・江東区のガスタンクが見える家の二階に時子は息子・浩（中川秀人）と二人で下宿しています。時子はミシンの下請けで夫・修一（佐野周二）の復員を待っているのです。子どもの年齢からして、夫は戦争末期生まれたばかりの子を残して召集されたのでしょう。ある時、浩が大腸カタルに罹ってしまいます。大腸カタルは『暗夜行路』の末尾、大山で時任謙作が罹る病気です。直接的には謙作に繋がるのですが、開封の野戦病院で急性腸炎で亡くなった先に紹介した山中貞雄にも繋がっていること確実でしょう。当時の日本は国民皆保険制度（１９６１年に実施され、すべての国民が安心して医療が受けられるようになりました）が導入されておらず、病院に掛かるのは大変でした。子どもの病気は時に一家の命取りとなったのです。『出来ごころ』（１９３３年）の父親は息子の病気治療費捻出のため、北洋漁業の人夫になろうとします。小林多喜二（１９０３～33年）の『蟹工船』（１９２９年）の世界で生きて帰る望みが少ない職場でした。

困り果てた時子は一晩、春を鬻いで息子の入院費用を得ます。私は事実としては売春行為は成立していない（根拠は布団の敷布が全く乱れていないこと。ただ、それは撮影手順ということがあるから読み過ぎといわれてしまうかもしれません）と論じました。とはいえ、潔癖な時子はそんな自分が許せないのです。浩が癒えて間もなく、

修一が復員してきます。留守中の様子を聞かれ、時子は正直に浩の病気のことをいってしまいます。問い詰められた時子は、全てを告白せざるを得ませんでした。妻の一度の過ちを許せるか、というのはまさに『暗夜行路』の問題です。

修一の過激なオイディプース的な知（ギリシア悲劇ソポクレス『オイディプース』のエディプス王は自らの出生の秘密を追求し、遂に自盲に至ります）は、その夜の妻の軌跡を追跡すべく、売春が行われた場所に向かいます。そこで出会った娼婦（文谷千代子）の身の上に修一は同情します。その夜、修一は同僚の佐竹（笠智衆）に、娼婦の働き口を依頼します。佐竹は、その女が許せてどうして奥さんが許せないのだと問います。修一は許してはいるのだが、落ち着かないと応えます。それに対し佐竹は「そりゃあ、お前の苦しいことはよく分かるが、意志的にも努力するんだな。もう許しているんなら、感情以上に意志を働かせて、その気持ちを抑えつけてしまうんだな。それは、立派なことだと思うんだ」と諭します。ここで『暗夜行路』の一場面から、末松と謙作の会話を引いてみましょう。

「無理な註文かもしれないが、事件として解決のついた事なら、余り拘泥しないほうがいい。拘泥した所で、いい結果は生れないから。つまらぬ犠牲を払ふのは馬鹿々々しい」

「只、当事者となると、よく分つてゐる事で、その通り気持が落ちついて呉れないのが始末に悪いんだ」

「本統にさうだ。然し意志的にも努力するのだな。さうしなければ直子さんが可哀想だ。感情の問題には相違ないが、君のやうに事件が十二分に分つてゐるとすれば、感情以上に意志を働かして、それを圧（おさ）へつけて了ふのは

人間としても立派な事だと思ふ」（『志賀直哉全集　第四巻』岩波書店、１９９９年）

小津が志賀の台詞をなぞっていることは明らかでしょう。この映画を観た志賀も苦笑いしたでしょう。修一はまさに「時」に身を任さねばならないのです。

朝帰りした修一と時子に修羅場が訪れます。なかなか素直になれない修一が、時子を突きます。時子は激しい音を立てて階段を転げ落ちます。階段落ちといえば、エイゼンシュテイン『戦艦ポチョムキン』（１９２５年）の「オデッサの階段」や『風と共に去りぬ』が有名です。これらの作品に比べればスケールが小さいものの、迫力では『風の中の牝鶏』の方がはるかに上で、私は世界一の階段落ちだと思っております。小津がシンガポールで観た『風と共に去りぬ』が日本で公開されるのは１９５２年のことです。「風」というタイトルとともに階段落ちがヒントになっていることは明らかでしょう。

だが、それ以上にこの修羅場のヒントになっている場面が『暗夜行路』にあります。謙作が妻・直子や末松と宝塚へ遊びに行こうとした時のことです。直子が赤ん坊のおむつの取り替えに手間取り、汽車（中国では火車ですね）の出発に遅れそうになります。プラットホームを走り、ようやくデッキにつかまった直子の胸を謙作は強く突き、直子はホームに倒れてしまいます。謙作の激しさは、その純粋性によります。直子を許してはいるのだが、「感情」を圧えることが出来なかったのです。しかし、この事件が謙作の「意志」を発動させる大きなきっかけとなります。こうして謙作は鳥取県の大山に赴き、「大調和」に至るのです。『暗夜行路』と『風の中の牝鶏』に仕掛けられたプロットは瓜二つといってもいいのではないでしょうか。こうして大尾の時子の祈りへと導かれま

す。階段の修羅場はもちろん不幸なものでしたが、この試練は時子・修一の夫婦にとって乗り越えられなければならぬものだったのです。

『風の中の牝鶏』はそれほど大きな物語ではありません。とはいえ、『暗夜行路』があくまでも男中心のマッチョな物語であるのに対し、小津はそれを女の物語として読み替えてみせました。『風の中の牝鶏』が戦後の作品である意味はそこにあり、小津安二郎が志賀直哉を超え出た先鋭性もそこにあるのです。小津安二郎は戦前から戦後にかけて、日本の家族の変容を描き続け、小津死後の家族像まで予想させることになった作家なのです。

『麦秋』は小津の中国体験、山中貞雄体験がストレートに反映している作品ですが、戦前の家長たる康一は妻や妹・紀子、さらには子どもたちへも強く出られない戦後の男のとまどいを見せてくれました。時に三世代にも渡って展開された小津の家族ドラマは、日本の、そしてそれは世界に通ずる普遍的な家族の変容を過去・現在・未来と描いてみせた訳で、その輝きはますます増していくでしょう。

小津はなぜそのような透徹した目を持ちえたのでしょうか。その結節点は中国体験・山中貞雄体験にありました。最後に有名なエピソードを紹介して私のお話しを締めくくりましょう。山中貞雄の死後、１９３９年5月のことです。『暗夜行路』読了の「未だに新しい感動」「神韻縹渺」の余韻が残るままに、小津は南京の古鶏鳴寺（ここに「鶏」という字が入っているのも偶然ではないものを感じます）を再訪しました。前年夏、小津は南京に長く滞在し、鶏鳴寺の住持から「無」の書の揮毫を受けました。藤田明は「前年そしてこの時に、そこまで深く意識的だっただろうか、結果的には予想以上の展開となった」（『平野の思想　小津安二郎私論』ワイズ出版、２０１０年）と述べますが、小津の中で「無」の一字は大きな意味を付与されていきます。「無」とは小津が感得した『暗

夜行路』の到達点であったのでしょう。それは生死を越えた「純粋」な境地なのでした。「無」の一字は、鎌倉・円覚寺の小津の墓碑銘として刻まれております。『麦秋』や『東京物語』には、はっきりと不在の死者の影が覆っています。小津安二郎は無数の死者の眼を通して戦後社会の変容を見つめ続けた作家なのでした。『東京物語』の尾道の家にはなにげなく瓢箪が映し込まれています。小さな指摘を挙げていけばきりがありません。このように、小津安二郎に与えた志賀直哉の影響は誠に大きなものがあったのです。

2013年11月16日（土）　小津安二郎大研究（東京都江東区古石場文化センター）

小津安二郎の見つめた戦争

中　澤　千磨夫

はじめに――研究テキストとしての小津安二郎――

北海道から参りました中澤千磨夫です。小津安二郎生誕の地である深川でお話しさせていただけますこと、大変名誉なことと感激しております。私は永井荷風の研究者でもありますので、ここは荷風「深川の唄」（1909年）の舞台ですから、二重の喜びを噛みしめています。お声をかけていただきました、前全国小津安二郎ネットワーク会長の長谷川武雄先生に厚く御礼申し上げます。

さて、「小津安二郎の見つめた戦争」というテーマ。重いですね。私が文学研究のトレーニングを受けていた3、40年前には、まだまだ現代作家を研究対象にすることは許されてはいませんでした。少なくとも没後50年を経なければ研究は始められないと教えられたものです。もっとも私の恩師は、そういった研究風土に風穴を開けた先生（亀井秀雄先生）だったのですが。ですから、永井荷風を研究対象とすることも許されたのです。荷風は19

59年に亡くなっていますから、まだまだ生々しかったのです。50年ということの説明として、だいたい50年もすれば関係者も鬼籍に入るからといわれたものです。つまり、研究の客観性が保証されるということなのですね。もっとも、今は現存作家すら「研究」の枠組みに入り、若い大学院生（研究職予備軍）にその事態が疑われることすらありません。それは、教養教育としての「文学」が衰退し、「研究」制度が無政府状態となり漂流していることの表れでもあります。

永井荷風の場合、研究と愛読という問題があります。荷風はいまだに非常に愛読者が多い作家で、しかも熱烈な男性ファンが多いのです。小津安二郎も同じですね。小津の場合男女問わずですが。例えば「小津先生」と敬愛を込めて呼ぶこともまま見かけます。もちろん、それはそれで麗しいことなのですが、やはり研究対象としては、「小津」と呼び捨てにする客観性が必要なのです。小津ハマさんにも初めてお目にかかったころ生意気にもそのようなことを申し上げました。

何十年も前の文学研究の遺風が有効であるわけはないでしょうが、奇しくも今年は小津安二郎没後50年に当たります。研究対象としての小津安二郎が古典の域に入り始める節目なのではないでしょうか。

『蓼科日記　抄』（小学館スクウェア、２０１３年）の刊行も拍車となって、村上茂子など小津の女性関係への言及が目立つようになってきたのも、その徴表でしょうか。なんで今さらとも思うのですが、やはり、50年現象です。小津ハマさんが、かつて結婚にもいろいろありますからと私に小さな声で語ってくださった（おそらく三重県飯高町の座談会）ことを思い出します。村上茂子は『東京物語』（１９５３年）に出演をしており（熱海の場面。流しのアコーディオン奏者）、字こそ違え、志げ（杉村春子）という役名にも反映しています。小津は近しい

人の名を役名に使うことがとても多い。『全日記小津安二郎』（田中眞澄編纂、フィルムアート社、１９９３年）への頻繁な登場から、村上茂子の存在は周知だったわけです。興味本位に取り上げられなかったのは、研究者のたしなみとでもいうべきものだったでしょう。「たしなみ」というと床しく聞こえますが、それはやはり同時代の遠慮というものでしょう。

『全日記小津安二郎』は田中眞澄さんの労作ですが、女性関係と並んで影を落としているのは、戦争の問題でしょう。女性問題とは比べものにならない深刻さを有する戦争に関しては、田中眞澄「兵士　小津安二郎」（『アサヒグラフ』１９９０・６・１）、『小津安二郎周游』（文藝春秋、２００３年）、『小津安二郎の戦争』（みすず書房、２００５年）などが先鞭を付け踏み込んだのでした。ほかに井上理恵「『東京物語』と戦争の影――嫁・原節子」（岩本憲児編『家族の肖像　ホームドラマとメロドラマ』森話社、２００７年）、私にも「「敗けてよかった」再考――小津安二郎の戦争・序説――」（『社会文学』22、２００５年）などの仕事がありますが、與那覇潤『帝国の残影　兵士・小津安二郎の昭和史』（ＮＴＴ出版、２０１１年）は、小津の戦争・中国体験を通して昭和史を語ってみせた、若き歴史家の快作です。歴史（histoire）とは物語る（historier）ことにほかなりません。つまり歴史は事実そのままではなく、いかに事実を組み合わせて語るかということなのですね。あの不幸な戦争について、日本、中国、韓国が鋭く対立し続けているのも「歴史」つまり「物語化」が異なるからです。

私は文学研究者ですから、身に着けた方法によって小津を読んできました。映画もまた文学テキストであると観じて分析していくということです。私が小津について最初に小さな文章（「マルクスの〈御真影〉――小津安二郎『淑女と髯』一斑――」『暗射』春、１９９５年）を書いた少し前くらいから、ビデオ装置の平準化によって、

それまで時間芸術としての制限を強く負わされていた映画が書物と同様に再読三読が容易なテキストとして変貌したのです。映画は観るテキストから読むテキストとなったのです。私は映画を読む、映画の読者という言葉遣いをします。

さて、今日は大きく分けてふたつの観点から小津の戦争について語りましょう。ひとつは、私自身の数次にわたる中国での調査からです。もうひとつは、小津作品そのものからあの戦争の残照を抽出して考察してみようということです。いずれも話し始めればきりがないことになるでしょうから、出来るだけ簡潔かつ凝縮してお話しいたします。

2005年3月上海・南京・開封・徐州

私が小津の戦跡を意識して中国に渡った最初は2005年3月のことです。3月16日から27日までの12日間、上海、南京、開封、徐州などを歩きました。同行したのは小岸昭京都大学名誉教授（ユダヤ思想研究）と関根真保京都大学大学院生（中国近現代史、現・立命館大学専任講師）です。私が小岸さんの調査に同行し、小津戦跡調査にもお付き合いいただいたという方が正確でしょう。この時の記録は中澤千磨夫「小津安二郎・山中貞雄の南京へ行く（メモランダム）」（『ブレーメン館』3、2005年）、小岸昭『中国・開封のユダヤ人』（人文書院、2007年）に残されております。

2005年3月16日、上海入りの当夜、虹口（旧・日本租界）で白酒（パイチュウ）を傾けながら夕食を摂った料理店があり

ます。その同じ料理店の女子従業員が近くの上海大廈（ブロードウェイマンションホテル。ちなみに戦前から戦後にかけて上海一の高さを誇った高級マンションで児玉誉士夫も住んでいました）前のマンホールから地溝油を収集しているのを、２０１３年3月に見ました（中澤千磨夫「死都上海２０１３（メモランダム）」『ブレーメン館』11、２０１３年）。やんぬるかな。中国を歩くということは、そういうものをも取り込んでまさに「消化」するということなのですね。

２００５年調査の開封では、山中貞雄が戦病死した野戦病院跡を訪ねました。もっとも開封の野戦病院は複数存在していた（山中は開封第五師団第二野戦病院から野戦予備病院第二十八班へ移り１９３８年9月17日死亡。（千葉伸夫『評伝山中貞雄　若き映画監督の肖像』平凡社ライブラリー、１９９９年）ため、私が訪ねた場所が確かに山中貞雄終焉の地とは断定しがたいのですが。毎年9月、京都の大雄寺（だいおうじ）で開かれる山中貞雄を偲ぶ会（小津安二郎が催していた山中会の精神を継いだもの）の発起人だった黒木和雄監督（『父と暮せば』など）は山中の劇映画を企画していましたが、監督の急死で実現しませんでした。タイトルは『ロングロングアゴウ』にしたいと黒木監督は漏らしていました。山中が長い顎の持ち主だったことをかけているのですね。黒木監督は確かＮＨＫＴＶのドキュメンタリー番組で山中終焉の地を訪ねており、２００５年9月の山中忌でお会いした時、私も開封に行ってきたと報告したのですが、翌年の監督急逝によって詳しいお話しは遂にお伺いすることが出来ないままになってしまいました。

山中は南京陥落後の徐州戦（１９３８年）で蒋介石が行った自傷作戦・焦土作戦により、黄河の水を飲んだことが原因で急性腸炎に罹り亡くなりました。蒋介石軍が黄河の堤防を自ら決壊させたのです。小岸昭『中国・開

封のユダヤ人』から漢族のガイド石磊（せきらい）が小岸に語った言葉を引きます。「中日戦争の時、蒋介石の部隊は開封陥落後鄭州へ移動して来ました。鉄道のレールはもちろん枕木までも外したり、鉄橋という鉄橋を爆破したりして抵抗しながら移動して来ました。一番有名な抵抗は、一九三八年六月九日、国民政府軍が日本軍の鄭州侵攻を阻止するため、鄭州以北一九キロの黄河花園口（かえんこう）で堤防を破壊したことです。これによって、三〇〇〇平方キロメートルに及ぶ地域が水没しました。その時、数知れぬ人々が犠牲になったり、行き場を失ったりしたのです」。開封城は「黄河の河床から七メートルも低いため、歴史上数えきれないほど大洪水に見舞われてきた」といいます。山中はそのため水を飲んでしまったのですね。この焦土作戦により、数十万から１００万人の中国人が死んだと伝えられております。

犠牲者の数ということでいえば、南京事件の場合も議論があるのですが、私は数字は二の次であり、ともかく虐殺行為はあったのだという立場に立っています。２００５年調査では侵華日軍南京大虐殺偶難同胞紀念館も訪れました。広島の原爆記念館と同様、修学旅行・研修旅行のメッカになっています。明らかな記述の間違いもあるのですが、南京では必ず訪れるべき場所です。南京にしろ、広島・長崎・沖縄にしろ、いやいやここ東京にしろ、暗い記憶や過去を喚起するための旅は必要です。門前仲町の富岡八幡宮には昭和天皇の巡幸碑があります。１９４５年3月10日の東京大空襲被災地巡幸（3月18日）で長靴軍服の天皇を見た堀田善衛は、鴨長明的リアリズムに立脚しようとしながらも、日本語で思考すること自体が必然的に藤原定家的な美（幽玄）に包摂されてしまうことまで想像の翼をはばたかせたのでした。

最近、東浩紀が中心になってチェルノブイリ・ダークツーリズム、そして福島原発ダークツーリズムが唱えら

れています（東浩紀編『チェルノブイリダークツーリズムガイド』（ゲンロン、２０１３年）、東浩紀編『福島第一原発観光地化計画』（ゲンロン、２０１３年））。言葉以前のモノ・ブツを残し、胸に傷として刻むことが人間の愚かさを忘れないようにするために必要だという主張ですね。原発観光だなんて不謹慎と思われる方が多いと思いますが、日々風化していくフクシマをどう記憶していくかという問題なのです。新千歳・成田間を飛行機で飛ぶと、福島第一原発がわりとはっきり見えます。パイロットは猪苗代湖が見えるとはいってくれますが、フクシマに触れることはけしてありません。何かおかしい。

２００５年3月20日、私たちは南京からバスで句容を目指しました。句容は南京東方の隣町、行政単位としては鎮江に含まれます。もちろん、小津安二郎と山中貞雄が中国大陸でただ一度会った場所を確認するためです。多くの資料が今でも１９３８年1月12日句容の砲兵学校で二人が会ったとしています。１９３９年同日の小津日記に「去年の今日上海から滁県に帰るさ句容で山中に会った」（『全日記小津安二郎』）という記述があり、これが原資料となります。滁県は南京事件の際、小津の部隊が居た所。南京の揚子江対岸です。中国行の直前に発表された矢野維之「戦場紙風船　映画監督・山中貞雄と支那事変」第3回（『諸君！』２００５・４）に伊藤大輔監督の遺品から見つかったという日本映画監督協会（小津が結成した協会ですね）宛の山中の手紙が紹介されていました。そこに「○湯水鎮の或る日、小津伍長が訪ねて来て呉れました」という記述があります。

私は「句容」、「砲兵学校」、「湯水鎮」というみっつのキーワードのみを頼りに句容へ向かったのでした。山中書簡にいう「湯水鎮」は句容にある地名だと信じて向かったのです。句容のバスターミナル近くの料理店でぼったくりに遭ったのですが、そこの店主から湯水鎮というのは湯山鎮のことではないか、しかもそれは句容ではなく

南京だと聞かされました。店主は自分の車で連れていくとまでいったのです。勘定の段になり、３人で４３３元（現在１人民元は16円ほど）とふっかけられたのです。べらぼうに高い。関根さんが戦ってくれて２５０元になったのですが、それでもべらぼう。この調査ではもう一度、徐州のタクシーでぼられました。まあ、騙されるのも楽しいのですが。

そこでタクシーで南京方面へ戻りました。運転手は地理に詳しく湯山鎮には蒋介石の別荘があったとか、人民解放軍の学校があると教えてくれたのです。走りながら見つけたのが「南京砲兵学院」の門です。中国人民解放軍砲兵学院南京分院。この場所こそ、小津が山中を訪ねた「砲兵学校」に違いないと私は確信しました。「上海から滁県に帰るさ」という行程から句容を過ぎて少しの湯山鎮を句容のうちと考えるのは自然です。

山中が「湯山鎮」を「湯水鎮」と呼んでいたのは、当時の日本側資料（地図など）の多くが「湯水鎮」と記しているのに倣ったものでしょう。ただ、その変化の経緯については考究が必要です。湯山鎮は温泉地ですから、湯水となったのかもしれません。

２０１２年調査の際、南京砲兵学院を再訪しました。この時大事件が起きますが、それはのちほど。

小津・山中再開の場所に拘るのは、中国から帰ってのちの小津作品、特に戦後作品に投影するものが大きいと考えるからです。それは山中貞雄ロスから来ていると断じていいものです。

小津と山中が最初に会ったのは１９３３年10月６日。京都祇園で井上金太郎、秋山耕作、大久保忠素と映画監督５人徹夜で飲んだのです。翌年には山中が深川亀住町の小津の家に泊まりに行くようになり、急速に親密になります。小津は山中を後輩映画監督として可愛がり、その作品も高く評価していました。それどころか、若きラ

イバルとして刺激を受けていた節もあります。また、山中『河内山宗俊』（１９３６年）のヒロイン役を務めた原節子を、山中が小津に薦めていたこともよく知られています。

２００５年調査で忘れられないことをもうひとつ。３月25日、徐州から上海へ向けて硬座の汽車に乗り込みました。上海まで6時間半ほどの予定。座れない。今は中国中新幹線網がめぐらされていますが、当時は硬座と軟座のみ。文字通りシートの差で、硬座に乗る日本人などまずいません。その分、普通の中国人と同じ空間を共有する楽しみがあります。硬座には物売りなどが沢山まわってきますから。それと忘れられないのは、開封・徐州間の車中のことですが、昼に一斉にカップ麺を食べだした中国人が食べ終わるとまた一斉に窓を開け、汁が入ったままの空き容器を畑に放るのです。それはそれは壮観です。中国人のマナーはなっていないなどといってはいけません。夏目漱石『三四郎』（１９０８年）の最初の方。三四郎が名古屋から東京への汽車で乗り合わせた広田先生は、「散々食ひ散らした水蜜桃の核子（たね）やら皮やらを、一纏めに新聞に包（くる）んで、窓の外（そと）へ抛（な）げ出（だ）した」（『漱石全集　第五巻』岩波書店、１９９４年）のでした。

途中からようやく座れました。車窓はどこまでもどこまでも青々とした畑です。昨日から変わらぬ風景。麦畑だと思うのですが、隣の夫婦に確認するとやはり「麦子（マイツーウ）」。若い麦です。初夏にはオレンジ色の麦秋となるのでしょう。徐州・南京間です。南京陥落後、１９３８年の徐州作戦で、日本軍は今私たちが進んでいるのとは逆の方向に向かっていたのです。「徐州徐州と人馬は進む」（「麦と兵隊」藤田まさと・詞／大村能章・曲／東海林太郎・歌、１９３８年）ですね。徐州陥落は麦秋の頃。どこまでも続く麦畑を見たことは大きな収穫でした。

関根さんが大変なことをいい出しました。上海まで6時間半といったのは勘違いで、乗車時間は12時間だとい

うのです。硬座に12時間。それもいい。『東京物語』の東京・尾道14時間半に近い体感を味わえるではありませんか。到着は深夜。相談の結果、南京で途中下車することになりました。南京では三夜続けて通った料理店もありました。もちろん再訪し、歓待されたこというまでもありません。「思いがけのう」もう一度南京にも寄れたのです。このところ私は上海に通い詰めていますが、一番肌に合う町は南京なのです。

2012年3月上海・南昌・九江・廬山・修水河・永修・南昌・喩家・南京

2度目の大きな調査は2012年3月24日から4月3日までの11日間。全国小津安二郎ネットワークの藤田明会長にお誘いを受けたのでした。同行は日中友好協会久居一志支部理事の稲森昭信さん。稲森先生は上海外国語大学と上海交通大学で日本語を教えていました。各地で教え子の方々に大歓迎を受けることになります。私は新千歳空港から先発して上海に入り、名古屋セントレア空港から来られたお二人と上海交通大学徐家匯キャンパスで待ち合わせました。ここは旧同文書院が使っていたキャンパスです。芥川龍之介も来ています。ここで、その後お世話になる呉保華先生、陸徳陽先生とも落ち合いました。もうひとり、2012年調査の通訳を務めてくれた当時大学院生だった朱曄（しゅよう）さん。朱さんのご両親は一人息子に日華の架け橋になるようにと祈って命名したそうです。この時の記録は「小津安二郎のサウスデイデイをめざす――江南の春2012メモランダム――」（『ブレーメン館』10、2012年）として纏めました。

日本軍は徐州会戦、武漢作戦に続き、1939年、南昌作戦を展開します。揚子江南岸の九江（小津はナイン

リバーと呼びました）から廬山を回り、永修河北岸に集結した日本軍は南岸の蒋介石軍と長らく対峙します。その南に南昌（小津はサウスデイデイとしゃれました）があります。

修水河渡河作戦のXデーは１９３９年3月20日。小津の部隊は毒ガスを使用しました。前後の動静を小津日記から拾ってみましょう。

3月16日、「野田高梧の上海アスターハウスからの手紙」。アスターハウスホテル（浦江飯店）は上海で最初の西洋式ホテルで上海大厦（ブロードウェイマンション）の向かいにあり、今でも営業しております。アインシュタイン、チャップリン、バートランド・ラッセルなどが泊まっています。そこに当時、野田高梧が居たのですね。野田の動静は大いに気になるところですが、研究は進んでいません。

3月18日、X―2です。「午後三時出発準備完了　三時三十分の出発。堰頭湖をまわって陳庄を距て資材ｒｅｄ８を携行して尖山で日の昏れるのを待つて修水河に出て敵前二百五十米で壕を掘る。二人一組三十米間隔の放射壕だ。僕ハ大塚と指揮班になる。暗闇の中で芝生の堆土を掘ると、墓場であるらしく円匙の先に棺桶がコツコツあたる」。「ｒｅｄ８」は陸軍が「あか」と呼んだくしゃみガスです。「暗闇の中で芝生の堆土を掘ると、墓場であるらしく円匙の先に棺桶がコツコツあたる」という表現には小津の想像力、作家的資質が見てとれます。「コツコツとあたる」ではないことがリズム感の良さを表しています。もう一点。小津軍曹は、撃てと「指揮」する立場ですがコンビを組んだ指揮官の名前です。「大塚」とは『東京暮色』で木村憲二（田浦正巳）が杉山明子（有馬稲子）をエスポワールで待たせる口実に使った不吉な名です。登場人物の名に何らかの意味を読み取ることが、小津映画では必要になります。

3月20日X、「雨。今日ハ菜の花も蓮華畑も杏のさかりも雨の中にある。修水河総攻撃の日だ。X日。／schedule は決ってゐる。／＊13より　飛行機の第一回空爆／＊16・30より18・30まで　砲兵の射撃第一回／＊18・30より19まで　飛行機の第二回空爆／＊19より19・25まで　砲兵の射撃第二回／＊19・25より19・28まで　特種(㊙)弾　射撃／＊19・30より　工兵の渡河開始／（略）十九時二十五分、特種(㊙)筒放射の命令だ。三十分渡河の開始。四十八分にハ青い吊玉が対岸に上る。この歴史的の敵前渡河も十八分で成功する。部隊ハ誰も異状はない。第三渡場から渡河する」。「雲が低く」「schedule」通りにはいかず（少なくとも「第一回」の）飛行機の空爆はありませんでした。他の資料では空爆があったとするものもあります。それでも計画通り四時半からの砲撃は始まりました。毒ガスも使用して対岸の敵を弱らせます。架橋をすみやか行うためです。日本軍は三箇所から渡河しました。渡河後、弱っている敵を殺傷。小津が渡った「第三渡場」では、わずかに18分で最初の兵が対岸に達したことが分かります。架橋は鉄船を並べ折り畳み式（莫蓙を巻いたような）の鉄板を渡していきます。戦車も渡れるのです。

2012年3月30日、私たち4人（運転手の吁(く)さんを入れると5人）は九江を出発しました。今回調査のメインイベントで、渡河地の見当を付け対岸で古老の話でも聞きたい、さらに小津の足取りを辿って安義、奉新あたりまで行ってみたいとの計画を立てておりました。ところがです。恐るべきというか、中国のインフラ。地図上で省道となっているメイン道路に舗装されていない箇所が続きます。それどころか穴ぼこだらけ。なんと吁さんのワゴン車が2回もパンクする羽目に陥ったのです。今の日本のタイヤはチューブレスでたとえパンクしても走れますが、吁さんの車は昔ながらのチューブタイヤでした。なんともはやの珍道中で大幅な時間ロス。そんな省道（国道に昇格していたことが別の地図で判明）の向こうに新幹線が2本平行して通っていたりするのです。

高速道路も、北京オリンピック（２００８年）、上海万博（２０１０年）で網の目のように張り巡らされました。恐るべきアンバランスです。中国の高速道路はとてつもなく面白い。農民が横切る、立小便、ヒッチハイクは当たり前。２００５年調査では、南京の高速道路工事現場で、生コンクリートに作業員が鉄筋を立てているそばから人々がその鉄筋を抜いて持ち去るという光景を目撃しました。お互い自分の「仕事」に没頭しているのです。このすさまじい混沌、エネルギーが中国の魅力です。

さて、修水河河畔に出る道がなかなか見つかりません。川に沿って道が走っているだろうという私たちの甘い予測は裏切られたのです。吁さんの機転（友人に電話をして聞いてくれたのです）でようやく、河岸にほぼ接している場所が見つかりました。河岸に接しているのはおそらくここだけです。だからといって、ここがみっつある渡河地点のひとつだなどと断言することは出来ません。近くにある筈の尖山も見つけることが出来ませんでしたし。でも、私たちはとうとう修水河の畔に辿り着きました。この付近であることは間違いありません。南昌作戦の後、こんなところまで足を延ばした日本人など居るでしょうか。小津安二郎がこの川を渡ってからちょうど73年と10日後のことです。とうとうと流る大河です。季節も同じ江南の春。河岸一帯は一面の菜の花です。文学好きの小津は山村暮鳥の「いちめんのなのはな」（「風景　純銀もざいく」『聖三稜玻璃』１９１５年所収）を知っていたに違いありません。小雨もよいの修水河畔で目に沁み込んだ黄色を忘れることは出来ません。

２０１２年調査では南京砲兵学院も再訪しました。しかし、事情が大きく変化していたため、事件が起こってしまいました。4月1日、今度は南京から娑（ろう）さんの車で出発です。7年前と様変わりしていたのは湯山鎮へ向かう高速も新しく整備されていたことです。私は以前に通った道（つまり、日本軍が南京城へ向かった道）を辿り

たかったのですが、中国の運転手さんはすぐに高速に乗りたがります。出発前に娄さんは砲兵学院は軍事施設だから写真は控えるようにと忠告してくれました。7年前は全く平気だったのです。兵隊さんに見られながら何枚も写真を撮りました。今回は事情が違います。軍事施設の撮影はご法度。尖閣問題の影響が大きいようです。

高速を降りて旧道へ入りしばらくすると、右手に見覚えのある白い門がみえました。7年前と異なり、門の上に五星紅旗が翻っています。門衛の兵士はまだ10代の少年といってもいい顔立ち。頬が赤い。諦めきれない私は、写真を撮っていいかと朱さんに聞いてもらいました。少年兵はいいという返事。嬉しくてたまらぬ私は早速デジカメ（7年前は中国製インスタントカメラでした）を取り出し、撮影し始めました。藤田先生稲森先生もおづおづとカメラを取り出します。

その時です。血相変えた上官が門の中から走り出てきたのは。私は一瞬の判断でカメラをズボンの右ポケットに押し込みました。上官は私に向かって中国語でまくしたてます。門衛少年兵の顔は凍りつきます。私は慌てて、道端で娄さんと談笑している朱さんに助けを求めました。「朱さん朱さん、この兵隊さんが撮っていいといったっていって」と。少年兵には気の毒だと思ったのですが、写真は守らなければならない。朱さんが早口でまくし立てると、上官が門衛に下問。少年が頷くと、致し方ないと思ったのでしょうか。上官は「対不起（トイプチー）」と私に敬礼してくれました。私も、思わず答礼しましたが、心臓は破裂しそう。そうそうとその場を立ち去りました。娄さんはだからいわないこっちゃないというような呆れ顔です。再び門の前を車が通過した時、稲森先生は恐怖で腰を屈めていたくらいです。

翌晩、上海交通大学の関行キャンパスで私たちのために晩餐会を開いてくれた呉先生に砲兵学院での事件につ

いてお話しすると、下手をすると拘束されたかもしれませんねといわれた。呉先生らしくクールに。この時ようやく、私は事の重大さに思い至り慄然としたのでした。

南京では２００５年、２０１２年とも鶏鳴寺を訪れました。１９３８年に小津が「無」の字の揮毫を受けた古寺です。パゴダが有名ですが、小津が訪れた１９３８、39年当時にはパゴダは戦火に焼けて（日中戦争以前）存在していなかったことが、12年の訪問で分かりました。いつもいつも迂闊ですね。「無」は皆さんよくご存じの鎌倉円覚寺の墓碑に刻まれている一文字ですね。まあ、のちほど簡単に触れましょう。

『風の中の牝鶏』、『麦秋』、『東京物語』、『秋刀魚の味』など――階段、麦の穂、「軍艦マーチ」――

中国調査の話で時間を費やしてしまいました。作品に刻まれた戦争・中国の影については駆け足にならざるを得ません。復員後の『戸田家の兄妹』、『父ありき』、そして戦後の全ての作品に濃淡こそあれ、戦争や中国の残照を読むことが出来ます。放屁映画の傑作コメディー『お早よう』でさえ、戦後高度成長が変えた日本人という意味合いで「戦争」の影響を描いたといってもいいのです。それは親への反抗という同じモチーフを扱った戦前の『生れてはみたけれど』と比較すれば明らかです。『麦秋』の父親・間宮康一（笠智衆）がパンを蹴る息子を強く折檻出来ない様子や妻・史子（三宅邦子）にやり込められるさまは、張子の虎であった家父長制の権威の崩壊を描いており、密かに通底しています。小津の描いた家族は、日本の、いや世界の今を見通していたのでした。

『東京物語』と『秋刀魚の味』にはともに「軍艦マーチ」が使用されていますが、その意味が大きく変容してい

ることを、私は論じました（『小津安二郎・生きる哀しみ』ＰＨＰ新書、２００３年、「「敗けてよかった」再考――小津安二郎の戦争・序説――」『社会文学』22、２００５年）。既にお読みいただいた方にはややこちたい論議になってしまいますが、整理した上で少しは発展させてみましょう。

まずは『東京物語』。子どもらを訪ね、尾道から東京へ出てきたものの、居場所を失ってしまう老夫婦。平山周吉（笠智衆）、服部（十朱久雄）、沼田（東野英治郎）の尾道時代に親しかった老人3人は御徒町あたりの居酒屋の二階で旧交を温めます。そこに流れる「軍艦マーチ」。物語は１９５３年の夏。梅雨がもうすぐ明けるかというころ。占領下では禁じられていた軍歌が近くのパチンコ屋か居酒屋で景気づけにかかっているという体でしょうか。ふたりの息子を戦死させた服部が「もう戦争はコリコリじゃア」とつぶやきます。「海ゆかば」との対比で勇壮な「軍艦マーチ」がこのシークウェンスに響く皮肉はいかにも小津らしい演出です。「海ゆかば」は『父ありき』（ゴス版）のラストですね。

平山も次男を失っています。その妻が紀子（原節子）です。脚本に「戦死」と書いてありますが、私の読みではっきり死んだとは確定していないというものです。戦死の公報が入っていない、あるいは仮に公報が入っていても遺骨など受け取っていないという状況だと考えています。それゆえに中吊りにされた紀子にとって残酷なのです。脚本に書かれているのに、なぜそんなことをいうのか。それはテキストをどう措定するかという問題に関わります。もちろん脚本まで広げてテキストとする読みも成立します。しかし、与えられた映像のみをテキストと措定するなら、戦死と断定することは出来ないということです。『晩春』でも曾宮（笠智衆）はおそらく東京の大学の教員（官）としかいえません。たとえ脚本に「東大教授」と書いてあってもです。テキストに関して作

者のいうことを鵜呑みにしてはいけない、疑ってかかるというのは文学研究のイロハです。

「軍艦マーチ」が今一度響くのは遺作『秋刀魚の味』においてです。駆逐艦の艦長だった平山周平（笠智衆）と水兵・坂本（加東大介）が、岸田今日子がマダムのトリスバーでレコードを聴きます。坂本が「ねエ艦長、どうして日本敗けたんですかね」と問うと、平山は「けど敗けてよかったじゃないか」と穏やかに応じます。これは高度成長期の日本人がひとしなみに抱いていた戦争に敗けたのに日本はなぜこんなに繁栄しているのだろうという不思議な感慨を描いているのだと、まず私は考えました。

それはそれで、間違いではないのですが、表面的な解釈に過ぎないと反省し、もっと苦いあの戦争への意識が反映しているのだと考えを進めました。「内田吐夢・小津安二郎対談」（『映画旬報』１９４１・11・21）で、小津は「山中は南京を確に見ているだろうと思うが……」と発言しています。「……」という沈黙に着目して、これは虐殺を指すこと疑いないと私は考えたのです。また、小津安二郎・内田吐夢・筈見恒夫・小倉武志「「戦争と映画」を語る」（『映画ファン』１９３９・11）で戦争では「懐疑的精神」がなくなり「肯定的精神」に戻ると発言しています。「肯定的精神」とは現実を見つめる眼そのものになることでしょう。死者の眼をもってといっていいのです。

日本の兵隊の心の闇を描いて暗澹とさせたのは『風の中の牝鶏』です。古く佐藤忠男は「われわれの失った何かについての苦渋と悲嘆を描」き、「小津自身の、兵士としての罪の意識」と無関係ではないと指摘していました（『小津安二郎の芸術　下』朝日選書、１９７８年）が、この作品は長らく失敗作として放置されたままでした。志賀直哉の『暗夜行路』（１９２１〜37年）のプロット（物語の転換点）と台詞までなぞったこの作品は小津の『暗夜行路』であり、時子は聖なるプシュケー（魂）なのだと私は論じました（「痙攣するデジャ・ヴュ――ビデオで

読む小津安二郎――⑥『風の中の牝鶏』――反復する階段、あるいはプシュケーの祈り――」『北海道武蔵女子短期大学紀要』34、２００２年、『小津安二郎・生きる哀しみ』）。新たに付け加えれば、志賀の『暗夜行路』があくまでもマッチョ（男性中心）な物語であるのに対し、『風の中の牝鶏』は女性の物語として読み替えており、そこにこそ、小津が志賀を越えた戦後的先鋭性があるのです（「小津安二郎と志賀直哉」２０１３・10・16、上海交通大学外国語学院招待講演）。

小津は志賀の『暗夜行路』を戦場で読み、心揺さぶられました。山中貞雄ロスがまだ癒えてはいなかったろう１９３９年5月のことです。前年鶏鳴寺住持に揮毫してもらった「無」の一字が、小津の中で膨らんでくるのです。

「無」はどのようにでも解釈できるきわめて抽象度の高い概念です。この時点では志賀の『暗夜行路』に表された「大調和」の境地。妻・直子の過ちを赦し、より高みに立とうとする「意志」の力の獲得に比定されていったのでしょう。

『風の中の牝鶏』には無気味な階段の空ショット（人物なしのショット）が十数度も繰り返されます。小津映画に階段が映されるのは稀なことです。『晩春』や『東京暮色』などの娘たちが二階の住人であるにも関わらずです。まあ、セットに階段を作ることを避けたというのが現実的理由でしょうけれども。『風の中の牝鶏』は特別ですが（脚本執筆時に茅ヶ崎館の階段をじっと見つめていたという森勝行さんの証言があります）、ほかで目立つのは人生の階段をどう昇るかを象徴する『一人息子』。そして、何より平山路子（岩下志麻）が嫁いだ後の『秋刀魚の味』ラスト近くの空ショットでしょう。

『秋刀魚の味』単独作品論の文脈に押し込めてしまえば、嫁いでしまった娘の喪失を懐かしむという読みで済みます。しかし、しかしです。小津安二郎映画論という文脈にこのショットを置いてみれば戦慄を禁じ得ないのではないでしょうか。なぜなら、『風の中の牝鶏』の恐怖を刷り込まれてしまった読者（映画を分析的に観る人）にとって、階段は恐ろしいことが起こる場所にほかならないからです。『秋刀魚の味』は娘を嫁にやってめでたしめでたしという単純なハッピーエンディングの物語ではけしてありません。『東京物語』の最後で紀子が義父の善意はともかく義母（つまり平山の家、ひいては夫・昌二、ひいては無数の死者）の懐中時計を形見として渡されてしまうこの上ない残酷さに通じます。この時、路子という名も気になり始めます。やはり『暗夜行路』に触発された『東京暮色』の沼田孝子（原節子）の幼い娘は道子です。さらには、溝口健二『女性の勝利』（１９４６年）の撮影中に子宮外妊娠で急逝した小津映画戦中のヒロイン桑野通子にも通ずるではありませんか。なんとも恐るべき小津の連環。

小津の登場人物が東京を離れ地方へ向かう場合、そこは恐ろしい場所であることが多いですね。志賀直哉ゆかりの尾道や奈良は例外ですが、たとえば『東京暮色』の室蘭。室蘭は鉄の町であったがゆえに、米軍による空襲・艦砲射撃を受け大きな被害を受けました。そればかりではなく、中国人強制連行の場所でもあります。また、『麦秋』で紀子が嫁ぐ秋田。この町も空襲を受けますが、花岡事件で有名な中国人強制連行の場所です。與那覇潤風にいえば、麻雀や「チャンそば」同様不吉な中国の記号を背負った場所なのでした。

私は小津の最高傑作は『麦秋』だと考えています。ラストの大和の麦秋の穂波は、徐州会戦に参加した小津安二郎、山中貞雄、日中問わず戦った兵士たち、さらにはあの戦争の数知れぬ死者への鎮魂を表したものなのです。

原節子が演じた紀子は『麦秋』で兄を、『東京物語』で夫を失っています（あくまでも戦争から帰ってきていないという意味）。この時、紀子は無数の死者の魂を鎮める巫女として日本のファム・ファタール（運命の女）となってスクリーンに定着させられたのです。もちろん、「ファム・ファタール」というのは意識的な誤用・曲解であることは百も承知です。

『東京物語』に明白な思想は平山とみ（東山千栄子）の死によく表れています。とみの危篤を知らされた紀子が貿易商社の机で空けている時、窓の外では戦後復興のビル工事が大きな音を立てて進行しています。また、大尾。とみが死んで周吉の背後にぽっかり出来た空間がいやがおうにも喪失を醸す平山の家。道にはボンネットバスが走り、尾道水道には何事もなかったようにポンポン船が行きます。人ひとりが「無」くなろうと、この世の「有」りようは何も変わらないのです。「無」が「有」に溶け入り「有」が「無」になるという思想です。

『秋刀魚の味』で「敗けてよかった」と平山がいうのは、起きてしまった現実はすべからく受け入れざるを得ないのだということでしょうか。それこそ「無」と「有」が融合する現実なのです。小津安二郎が観じた境地は「無」常というような分かりやすい言葉では括れない苦い現実、哀しい人間のありようなのでした。

おわりに――中国人女性から突きつけられた問い――

ちょうどひと月前、10月16日。上海交通大学で日本語を学ぶ大学院生や学生たちの前で「小津安二郎と志賀直哉」と題して話をしてきました。今日のお話と一部重なります。その打ち合わせのため、3月に上海交通大学を

訪れた時、郊外にある大学から町中へ帰るのに一緒になった卒業生の女性がいました。日本語専攻ではないのですが、大学院を出て働いているということ。呉先生が英語で話しながら帰ったらと紹介してくれたので、地下鉄1時間ほどの道のりをご一緒しました。

お互い拙い英語で色々話しました。上海になぜそんなに来るのかという質問に小津安二郎の足跡を調べているのだと応えました。「He came to Shanghai as a soldier.」というと、すかさず彼女は表情を変えず「So, he killed many Chinese.」と応えました。彼女の言葉がぐさりと胸に刺さったまま、私は長時間の沈黙を強いられました。反日教育を受けてきた中国の若者たちが、いわゆるクールジャパンと呼ばれるアイテムに強い親近性を持っていることはよく知っています。彼女も「エヴァンゲリオン」が好きだといいます。だが、それはそれ、これはこれなのです。しかし、私は言葉を失ってしまったのです。だって戦争だったのだから、では答えになりません。今なおなんと応えるべきだったのか見つかっているわけではありません。だが、小津安二郎は中国体験・戦争体験で確実に変わったのです。芸術家として大きな飛躍を遂げたのです。愚かなことや過ちも含め人間は受け入れていかなければならない。小津の「無」はそんなところに通じています。少なくとも『麦秋』は真の意味での反戦映画ですし、『秋刀魚の味』の階段が象徴していたように、どんなことがあろうと人は哀しみを抱えて生きていかなければならないという大きな肯定。否定が肯定に、「無」と「有」が融合するありようを小津は描いたのだ、と彼女にはいえるでしょうか。